平成27年度

東京家政大学 女性未来研究所

活 動 報 告 書

Tokyo Kasei University
The Institute for the Advancement of Women
Annual Activity Report

Higuchi

はじめに

東京家政大学女性未来研究所の２年目の活動記録をここにまとめさせていただきました。昨年度から引き継いだグループ研究は、今年は中間まとめとして３年目への展望を開く年でもあります。それぞれの報告の中から、その動きをお読み取りいただければ幸せです。

本年度も、自治体はじめ外部の団体との交流は活発にすすみました。発足間もない本学女性未来研究所に外部からの注目が集まり、本年度は２回の外部講師を招いてのシンポジウムを開講することができました。第１回「女性とメディア」シンポジウムは、学生たちの大きな反響を呼び、詳細なアンケート回答を得ることができました。本活動報告書とは別に、本年度の活動記録としてまとめる予定です。

今年度は、戦後70年という節目の年。全国各地でその記念行事がありました。思えば女子大学が男子の大学と同じ位置を占めるようになったのも、女性が職場をはじめ社会に参加する新たなスタートラインになったのも、この70年前、1945年のことです。

とはいえ、これまでの70年の歩みは必ずしも常に順風満帆ではなく、女性たちは努力と忍耐を必要としました。1985年の女性差別撤廃条約、それに伴う男女雇用機会均等法、家庭科男女共修などを経て、今年度は女性活躍推進法が成立。女性が参画してつくる未来のかたちが問われています。本年度の活動報告書がその問いへの小さな、しかし確かな回答でありますよう祈っています。

樋口　恵子

東京家政大学女性未来研究所　所長
東京家政大学名誉教授

1956 年、東京大学文学部美学美術史学科卒業。東京大学新聞研究所本科修了。時事通信社、学習研究社、キヤノン株式会社を経て、評論活動を行う。現在、NPO 法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長、厚労省社会保障審議会委員。

Contents

平成27年度

東京家政大学 女性未来研究所

活 動 報 告 書

Tokyo Kasei University
The Institute for the Advancement of Women
Annual Activity Report

2 はじめに 樋口惠子

7 Chapter 1 女性未来研究所

8 1. 女性未来研究所 運営委員・事務局・研究員等

9 2. 平成27年度 女性未来研究所 活動記録

11 Chapter 2 研究プロジェクト報告

12 1. 現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題
自立意識に関する調査項目の設定
青木幸子、崇田友江 、鮫島奈津子

14 2. 女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス
「大学でワークライフケアバランスを考える会第4回研究会」報告
田中恵美子、宮地孝宜

16 3. 健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案
食とジェンダー 男性の行事食・儀礼食への意識
宇和川小百合、色川木綿子

18 4. 健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案
加齢と食事摂取傾向の変化 第2報 経年変化とその特徴
貝原奈緒子、木元幸一

20 5. 男女共同参画で行う地域防災・減災
東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討
齋藤正子、小櫃智子

22 6. 本学園アーカイブス
校祖渡邉辰五郎と女子教育：裁縫教育が与えた人生の歩みへの影響
吉村扶見子、太田八重美、務臺久美子、木元幸一

26 7. 60年代型団地における女性たちの「物語」と「21世紀型互助」
～「相談拠点」「地域の縁側」の新機能による地域変革を求めて～
「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」
都会の限界集落から見える「未来」
松岡洋子、齋藤正子、米澤純子、和田涼子、宮地孝宜、井上俊哉

31 Chapter 3 男女共同参画講座

32 1. 板橋区 いたばしI（あい）カレッジ前期（全5回）
「戦後70年、女と男の歴史と文化」
伊藤節 / 樋口惠子 / 西山千恵子 / 小林緑 / 手嶋尚人

38 2. 北区　さんかく大学（全５回）
「女性とスポーツ」
三ツ谷洋子 / 梅谷千代子 / 北田和美 / 樋口惠子 / 笹川あゆみ

42 3. 群馬県　とらいあんぐるん 大学連携講座（全４回）
「文学・芸術の世界で男女共同参画を考える」
伊藤節 / 志尾睦子 / 西山千恵子 / 小林緑

45 Chapter 4　学園祭

46 緑苑祭企画
「恋愛と結婚、その変遷を考える～家族・儀式・男女の意識から～」
伊藤節

51 Chapter 5　女性未来研究所シンポジウム

52 第１回女性未来研究所シンポジウム
「メディアと女性～発信者として受信者として～」
落合恵子

55 Chapter 6　外部セミナー / 研修会 / シンポジウム等

56 1. 東北大学出張講座報告「女性と社会進出」
～国際教養としての「キャリア教育」の必要性～
並木有希

58 2. 日本国政府主催「WAW! Tokyo 2015」参加報告
～エンパワメントの様々な可能性に向けて～
並木有希

60 3. 一般社団法人 ジャパンダイバーシティネットワーク（JDN）主催
「シンポジウム 2015」参加報告
～ダイバーシティが社会を変える（Diversity is the Game Changer）～
木元幸一

62 4. 独立行政法人 国立女性教育会館（NWEC）主催
「大学等における男女共同参画推進セミナー」参加報告
～21世紀の日本は女性が救う！～
仲谷ちはる

64 おわりに　伊藤節

65 執筆者一覧

66 編集後記　仲谷ちはる

Chapter 1

女性未来研究所

運営委員・事務局・研究員等

平成27年度研究所活動記録

女性未来研究所　運営委員・事務局・研究員等

運営委員会

1. 川合 貞子	学長
2. 岡 純	家政学部長
3. 井上 俊哉	人文学部長
4. 今留 忍	看護学部長
5. 岩田 力	子ども学部長
6. 高木 くみ子	附属女子中学高等学校長
7. 樋口 惠子	女性未来研究所所長
8. 伊藤 節	女性未来研究所副所長

事務局

1. 仲谷 ちはる	主任

特任研究員

1. 落合 恵子	教授

兼任研究員

1. 平野 順子	児童学科准教授
2. 宇和川 小百合	栄養学科准教授
3. 青木 幸子	栄養科教授
4. 早瀬 郁惠	造形表現学科准教授
5. 並木 有希	英語コミュニケーション学科准教授
6. 松岡 洋子	教育福祉学科准教授
7. 宮地 孝宜	教育福祉学科講師
8. 齋藤 正子	看護学科講師
9. 小櫃 智子	子ども支援学科准教授
10. 内野 美恵	ヒューマンライフ支援センター専門員・准教授
11. 宗田 友江	附属女子中学高等学校教諭
12. 鮫島 奈津子	附属女子中学高等学校教諭
13. 太田 八重美	博物館専門主査
14. 吉村 扶見子	図書館事務長
15. 柳井 久美子	大学院書記

オブザーバー

1. 木元 幸一	前学長・理事・栄養学科教授
2. 岩井 絹江	理事

平成27年度　女性未来研究所　活動記録

4/30（木）	第１回研究会開催
6/11（木）	第２回研究会開催 / 第１回運営委員会開催
7/ 9（木）	第３回研究会開催
15（水）	JDN（Japan Diversity Network）主催 第４回勉会出席
8/28（金） 29（土）	WAW!2015国際シンポジウム出席
9/ 2（水）	JDN主催 シンポジウム2015出席
10（木）	第４回研究会開催
25（金）	● 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期」① 「近代の少女小説と社会〜〝少女〟の誕生をめぐって〜」伊藤節
26（土）	第34回高齢社会をよくする女性の会in長岡　第４分科会発表「大介護時代を地域で生きる〜安心と覚悟〜」齋藤正子
10/ 2（金）	● 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期」② 「日本の家族と戦争〜ジェンダーをすすめた戦時体制〜」樋口惠子
8（木）	第５回研究会開催
11（日）	● 北区共催事業「さんかく大学」① 「スポーツウーマンもう一つの戦い」三ツ谷洋子
15（木）	● 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期」③ 「描く女・描かれる女〜美術とジェンダー入門編〜」西山千恵子
18（日）	●北区共催事業「さんかく大学」② 「身体表現における美とジェンダー」梅谷千代子
22（木）	● 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期」④ 「実はたくさんいた女性作曲家〜クラッシック音楽の常識を覆しましょう〜」小林緑
25（日）	学園祭企画シンポジウム 「恋愛と結婚、その変遷を考える〜家族・儀式・男女の意識から〜」板本洋子、信田さよ子、古市憲寿
29（木）	●板橋区共催事業「いたばしIカレッジ」前期⑤ 「まちづくりにおける男女の役割〜現在と未来　台東区谷中を事例として〜」手嶋尚人
11/ 7（土）	● 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学連携講座」① 「『赤毛のアン』とジェンダー」伊藤節
8（日）	● 北区共催事業「さんかく大学」③ 「スポーツにおける女性の歴史とジェンダー」北田和美
11（水）	高齢社会をよくする女性の会　11月例会発表「オランダの高齢者福祉最新情報」松岡洋子
12（木）	第６回研究会開催
15（日）	●北区共催事業「さんかく大学」④ 「私とスポーツ・オリンピック」樋口惠子
18（水）	JDN主催 第５回勉強会出席
21（土）	● 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学連携講座」② 「日本映画界でみる女性の活躍〜映画と生きる女性たち〜」志尾睦子
28（土）	● 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学連携講座」③ 「描く女、描かれる女〜美術とジェンダー入門編〜」西山千恵子
29（日）	● 北区共催事業「さんかく大学」⑤ 「まとめのワークショップ」笹川あゆみ
12/ 3（木） 4（金）	平成27年度「大学等における男女共同参画推進セミナー」出席
5（土）	● 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学連携講座」④ 「女性に作曲はできない？〜音楽のジェンダーを考える〜」小林緑
10（木）	第１回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム開催 「メディアと女性〜発信者として受信者として〜」野本瑞穂、金井田亜希
1/14（木）	第７回研究会開催
30（土）	大学でワークライフケアバランスを考える会（WLCB研究会）第４回研究会開催「女性として生きること」中島かおり
2/18（木）	第８回研究会開催
3/30（水）	『平成27年度東京家政大学女性未来研究所活動報告書』発行
31（木）	『戦後70年、女たちのステージ…周縁から中心へ』発行 『第１回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム報告書』発行

Chapter 2

研究プロジェクト報告

15名の兼任研究員を中心とした3年間
（2014年～2017年）の研究プロジェクト

平成27年度　研究プロジェクト

1 ライフサイクルアプローチ

（1）現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題
代表者：青木幸子 / 崇田友江、鮫島奈津子

（2）女子大学におけるキャリア教育と
ワーク・ライフ・ケア・バランス
代表者：宮地孝宜 / 太田八重美、田中恵美子、並木有希、
早瀬郁恵、平野順子

（3）60年代型団地における女性たちの「物語」と「21世紀型互助」～「相談拠点」「地域の縁側」の新機能による地域変革を求めて
代表者：松岡洋子 / 井上俊哉、齋藤正子、宮地孝宜、米澤純子、
和田涼子

2 栄養と女性

（1）健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案
代表者：木元幸一 / 内野美恵、宇和川小百合、貝原奈緒子、
色川木綿子

3 災害と女性・子ども・高齢者

（1）男女共同参画で行う地域防災・減災～東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討
代表者：齋藤正子 / 小櫃智子

4 アーカイブズ

（1）本学園アーカイブズの作成および他大学（本学卒業生の創設した大学等）のアーカイブとの交流
代表者：木元幸一 / 岩井絹江、太田八重美、川合貞子、務台久美子、
吉村扶見子

Chapter 2-1

現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題

自立意識に関する調査項目の設定

青木幸子 Aoki Sachiko ，崇田友江 Muneta Tomoe ，鮫島奈津子 Samejima Natsuko

研究グループでの調査及び他の調査結果を参考に、現代の中学生・高校生の精神的、経済的、社会的、生活的自立の実態と意識の傾向について把握し、発達課題の特徴を明らかにする。

本年度の研究テーマと研究の進捗状況

本研究グループは、今年度のテーマを「現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題」に設定した。アプローチの方法として中学生・高校生を対象とした自立意識に関する調査を実施する計画を立てた。その際、調査結果の分析において、年代の違いによる生徒の変化も併せて把握するため、調査項目は、先行研究の調査項目を援用しながら本研究グループ独自の項目を加えて調査票を作成した。それは、この調査結果を踏まえて、年代による発達課題と現代の生徒の特徴を明らかにし、発達課題をクリアするための学習内容について検討することを研究の最終目的としているためである。

調査票の作成後、女子校にて予備調査を実施し、調査項目を修正し、調査票を完成させた。その後、本調査を実施した。調査対象校の選定は私立学校に絞り、調査の実施に関してはすべて調査対象校の実情・意向を尊重した。その結果、現在、男子校中学生の調査票は回収できておらず、新たな調査対象校を検討中である。したがって、現時点で調査項目の分析はできておらず、テーマについて論述するには至っていない。

以上の調査の進捗状況に鑑み、調査の方法と調査項目を挙げて本年度の活動報告としたい。

なお、調査の実施に当たり、本学附属女子中学校・高等学校教頭の石垣寿先生には多大なるご尽力をいただいた。記して感謝申し上げる。同時に、多忙の中、調査にご協力くださった調査対象校の先生方、生徒の皆様に厚く御礼申し上げる。

調査の方法と内容

(1) 調査対象：私立中高一貫校の女子校、男子校、男女共学校の中学校・高等学校のそれぞれ３年生
(2) 調査時期：2015年7月～12月
(3) 調査方法：郵送調査法
(4) 調査内容：学校生活について17問、家庭生活について19問、あなた自身のことについて29問の計65問

調査の内容は、紙面の都合上、調査項目の設問のみを掲載する。

「中学生・高校生の自立意識と発達課題」に関する調査

私たち東京家政大学女性未来研究所の研究員は、青年期の自立に関する研究を進めており、中・高校生の実態を把握するため、調査を実施することになりました。皆さんのご協力をお願いいたします。

青木幸子・崇田友江・鮫島奈津子

学校種・共学 / 別学校・学年：中学校・高等学校、男子校・女子校・男女共学校、３年

皆さんは大人への階段を一段ずつ上り始めています。学校生活や家庭生活での様々な出来事を通して成長しています。卒業学年を迎えた皆さん、ここで少し立ち止まり、自分自身を見つめ直してみましょう。

各設問について、指示に従って回答してください。（複数）とある場合は、当てはまるものすべてに〇をつけ、それ以外には１つ〇をつけてください。

１．学校生活について

1）学校は楽しいですか。
2）何が一番楽しいですか。
3）授業はよく理解できますか。
4）予習・復習をしていますか。
5）授業内容のレベルはどうですか。
6）授業の進み方はどうですか。
7）受験勉強は学んだことをまとめる良い機会だと思いますか。
8）受験勉強は本来の勉強とは言えないと思いますか。
9）学校の成績はどれに当てはまりますか。
10）いじめをしたことがありますか。
11）仲間はずれにされたことがありますか。
12）あなたは親しい友人が何人位いますか。
13）親しい友人とはどのように付き合いますか。
14）親しい友人のためにどれくらい援助することができますか。
15）担任の先生とはどのように付き合いますか。
16）部活動に満足していますか。
17）学校生活に満足していますか。

２．家庭生活について

1）父親とよく話をしていますか。
2）父親は仕事重視ですか、家庭重視ですか。
3）父親は友人のようですか、厳しいですか。
4）母親とはよく話をしていますか。
5）母親は仕事重視ですか、家庭重視ですか。
6）母親は友人のようですか、厳しいですか。
7）父親はどれくらい家事をやりますか。
8）父親はどんな家事をやりますか。
9）平日、あなたは家事をしていますか。
10）あなたはどんな家事をやりますか。
11）父親、母親と朝晩の挨拶をしますか。
12）父親・母親はあなたのことを理解してくれていますか。
13）あなたは父親・母親にしてほしいことはありますか。それはどんなことですか。
14）あなたは父親・母親にしてほしくないことはありますか。それはどんなことですか。
15）あなたは親離れしていますか。
16）親離れしたのはいつですか。また、いつごろ親離れできそうですか。
17）家族は何人ですか。
18）祖父母と同居していますか。
19）あなたは家庭生活に満足していますか。

３．あなた自身のことについて

1）日ごろの体調や気になることは何ですか。（複数）
2）自分の身体的心理的成熟を自覚していますか。
3）あなたは塾に行ったことがありますか。
4）あなたは塾以外の習い事をしていますか。
5）自分でできることは何ですか。（複数）
6）平日の学校外での勉強時間はどれくらいですか。
7）平日のテレビ視聴時間はどれくらいですか。
8）スマホ・ipad などの時間はどれくらいですか。
9）よく見たり、利用したりするものは何ですか。（複数）
10）援助交際や出会い系サイトについてどう思いますか。
11）友人と個人的に旅行や買い物、映画などに出かけますか。
12）友人関係に満足していますか。
13）「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業についてどう思いますか。
14）あなたは結婚したいですか。
15）あなたは子どもを何人くらいほしいですか。
16）あなたは結婚した後、どのような働き方をしたいですか。
17）あなたは結婚相手に何を望みますか。（3つに〇）
18）自分が将来なりたいものや、進路が決まっていますか。
19）進路の最終目標は決まっていますか。
20）進路を決める際、重視するのは何ですか。
21）仕事を選ぶ際、重視するのは何ですか。
22）キャリア教育は進路決定に役立ちましたか（役立ちそうですか）
23）将来、どんな生活を送りたいですか。
24）将来、どのような生き方をしたいですか。
25）今、悩みや心配事はありますか。（複数）
26）日本についてどう思いますか。（複数）
27）日本のイメージを表すものはどれですか。（複数）
28）日本人に当てはまるものはどれですか。（複数）
29）あなたがこれから大事にしていきたいことは何ですか。（複数）

Chapter 2-2

女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス

「大学でワークライフケアバランスを考える会第４回研究会」報告

田中恵美子 Tanaka Emiko ，宮地孝宜 Miyachi Takayoshi

本年度は「本学卒業生の大学時代の学習とキャリア・ライフコースに関する調査」実施に向けた調査票の作成および発送（回収は次年度４月）、「大学でワークライフケアバランスを考える会 第４回研究会　女性として生きること～20代の女性に知っておいて欲しいこと（1月30日）」を実施した。本稿では後者の研究成果について報告する。

1月30日、前日の「雪が降る」という予報にハラハラしたが、何とか雨で収まり、50名近い参加者が集まり、盛会となった。

講師の中島かおりさんは、助産師であり、昨年12月に「にんしんSOS東京」という団体を立ち上げられた。講演会でのお話は、もちろん、それらの活動について触れられたが、それだけにとどまらず、多岐にわたる大変興味深いものとなった。

中島さんは、大学を卒業後遺伝子関係の研究をされ、非常に多忙な日々を過ごされていた。その時、（ご自身も）思いがけない妊娠をされ、海外での研究の道も閉ざされ、出産、育児があまり楽しいものではなかったとのこと。仕事と子育てを両立させながら、何とか乗りきった感じだったという。ただ保育園で出会ったママ友の中には3人、4人と子どもを産んでいる人がいて、その人たちが助産院で幸せな妊娠・出産を経験されていることを知り、次は私も助産院で、と考えられたとのこと。そして、待ち望んだ第二子を身ごもり、念願の助産院で出産した後、取り上げてくれた助産師さんに、「助産師さんっていい仕事ですね」といったら「あなたも今からでもなれるわよ。一緒にやりましょうよ」といわれ、あれよあれよと再び大学に戻り、助産師の資格を取り、病院勤務での修行を経て、自分の子どもを産んだ助産院で、今現在働かれているとのことだった。

中島さんの説明によれば、助産師とは、もともとお産婆さんといわれるように比較的年配の女性が行う仕事だったが、明治以降資格化され、職業として確立していった。大名行列の前を横切ることが許されたのはお産婆さんだけだったというほど、昔から命に関わる者として特別な扱いを受けてきたが、同時に命を操る神秘的な者としても捉えられ、例えば西洋で行われた魔女狩りなどの対象は主に助産師だったとのこと。フランスでは、賢い女性という意味の言葉でもあり、尊敬される存在でもあり、しかし恐れられる存在でもあったという。そして、お産婆さんは、出産だけを行うのではなく、沐浴など出産後の赤ちゃんのケアも行っていた。つまり地域に普通に存在していたのだという。

この、出産は病気ではなく、医師が関わるというよりはお産婆さんが行うものという習慣は、昭和の初期まで続き、戦後も昭和30年代ごろまで病院と自宅出産が半々ぐらいだった。しかし、その後急激に病院での出産が当然のこととなり、それと同時に助産師も病院の中で働くようになった。元来地域で出産、育児を助けてきた存在がどんどんいなくなった状態が今である。しかし中島さんはそれとは逆に、病院から地域へ、そして今は赤ちゃん訪問など行政の仕事も行っているとのことであった。

さてこの後会場に問いかけながら、講演は続いた。まず、人はいつまで産めるのか、生物学的な産み時はいつかという話である。きくちさかえ氏『卵子ストーリー』（小学館）の図を用いて、卵子の誕生から死までを説明してくれた。これによると、母体として最良の時期は20歳～35歳ぐらい、24歳ごろがピークとのこと。文科省の高校生用副読本に載っていたことと同じではあるが、『卵子ストーリー』の図で見ると、嫌みがなくていい。

ところで、女の赤ちゃんは胎児の時にすでに卵子を体内に持っている。つまりそれは、お母さんは妊娠し、女の子を身ごもったとき、孫の卵まで作っているということなのだという。私も理屈ではわかっていたが、さすが

に孫のことまで考えていなかったことに気が付いた。いかに妊娠期の環境が大事か、今の自分の身体だけではないという表現は、ここまで続いていたのかと改めて考えさせられた。

次に出産に絡めてEBM（evidence based medicine 科学的根拠に基づいた医療）の話があった。科学的根拠があっても、習慣が変わらない場合もあるし、科学的根拠のないことは、現在は重視されないということでもある。例えば母子同室は母子にとっていいという科学的根拠があるにもかかわらず、病院の管理体制の下に行われない場合があるとのこと。それと絡めて、現在の女性の体は徐々に退化しているとの説明があった。100年前ごろの女性は月経を排せつ同様に自分でコントロールしていたという。また、子どもの排せつも子どもと密着したおんぶや抱っこをしていることで、感じ取り、対応できるので、漏れを未然に防げるということだった。この動物的な感覚というものは、おそらく科学で証明できることでもないが、脈々と育児の中で、生活の中で続いてきた人間の力だったのだが、今はそれが失われてきている。それは動物としての人間の本能が徐々に失われてきているということなのだと思う。

続いて、社会的な産み時はいつなのか、という問いがたてられた。初産の年齢は、昭和の時代は25歳～29歳が多かったが、平成になると徐々に30台に移行し、現在は30歳～34歳が最も多いが、35歳以降も微増とのこと。この層は現在の日本の人口ピラミッドでは少なくなっている部分で、いわゆる少子高齢化の原因が納得できるものだった。さらに人工妊娠中絶の推移を見ると、避妊技術が進んだこともあって、昭和50年代に比べて数は減ってきており、またすべての年代で中絶数はあるが、かつて出産できていた20代の中絶が多く、社会的産み時が明らかにずれてきていることが示されていた。また内閣府による女性のライフコースに関する調査

によれば、子どもが小さい時は働きたくないという女性も比較的多いが、子どもが3歳を超えると右肩上がりで何らかの形で働くことを望む傾向があるが、現実としては、それが希望に比べて微増であり、子どもがいる場合に働きにくい環境であることがはっきりと示されていた。つまり、社会的な産み時は30代、そしてそれも働くことと天秤にかけつつ、迷い、悩んで働けなくなることも覚悟しての出産になるということなのだ。

さて、最後に「ではあなたの産み時はいつ？」と問われた。相手のあることは思い通りにならない。「にんしんSOS東京」はこれまで全国の他府県の相談所に東京から相談が押し寄せていたことを受け、東京のことは東京で、相談者に寄り添う身近な機関として、2015年12月に設立された。相談事例では、いわゆる10代の妊娠という出産が難しいと思われるケースもあれば、年齢としては適齢期であり、相手との結婚も望んでいるにもかかわらず今、育てる自信がないというものだったりといろいろだった。中島さんは、相談者として、この人産んでもいいのに、と思えるケースもあるけれど、本人が産めないといっているときに無理に押し付けたりはしない。ただ、産むことと育てることを一緒に考えなくてもいい。産むことは妊娠した人にしかできないけど、育てることはほかの人でもできる。そういうごく当たり前のことをちゃんと伝えていくことで考えが変わる人もいる。さらに産婦人科医池上明氏の話を引用しながら、たとえ中絶という道を選んだとしても、それは一つの選択であるし、生き方であるから尊重するとおっしゃった。

講演を聞いて改めて命の神秘を思った。今、ここに宿った命は、いろんな偶然の重なりあいの中で宿るのであって、それをコントロールしきれると思わない方がいい。ただ起きた出来事を受け止めていく。それを一人ではなくみんなで。そのお手伝いをするのが「にんしんSOS」という組織なのだろうと思う。

さて、フロアからの感想を最後にとり挙げておきたい。

「このような機会がなければ、女性として生きること、出産やそれについての社会状況など知ることはなかったかもしれない」

「産んでも育てないという（選択肢がある）のは初めて知った」

他にもたくさんの貴重なご意見をいただいた。アンケートからご満足いただけたことがわかり、今回の企画を行うことができてよかったと改めて思った。ご協力いただきました全ての方にお礼を申し上げます。ありがとうございました。（田中恵美子）

Chapter 2-3

健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案

食とジェンダー　男性の行事食・儀礼食への意識

宇和川小百合　Uwagawa　Sayuri　，色川木綿子　Irokawa　Yuko

食に関する調査では、料理を行う、炊事を行うのは女性と考えて対象者は女性で行うことが一般的であり、調査対象者として男性を選択する時には別の目的があってされることが多い。今回は行事食および儀礼食について、関東甲信越地区5,324名の調査を行った際の男性の回答者437名について、その認知度と経験について検討した。

1. はじめに

「私作る人、僕食べる人」というコマーシャルが流れて話題となったのは、今から40年前の話であるが、今でも「お弁当男子」と話題になるところをみるとあまり変わった様子は見られない。また、有職男性の家族意識[1)]では、「夫婦の役割分業」を指示する意識は「結婚は幸福の源」とみなす意識と密接に関連していて、「男性の家事」や「女性の就労」が支持されてもなお「夫婦の役割分業」が根強いと考えられる、と報告している。

また、「女子力」という言葉も最近よく聞かれる。女子力が高い、という言葉の中に「料理ができる」、「家事ができる」という家庭的であることが重視されている、という報告[2)]がある。食生活や食事の調査を行う時、栄養指導を行う時にも対象者の男性以外に妻や女性に対して行う、ということが自然に行われている。しかし、これからは父子家庭、男性による介護、男性の一人暮らしという世帯もますます増えていくと思われるので、自分の健康は自分で守り、自分の食事は自分で考えて食することが大事になる。今回は、行事食と儀礼食において男性の意識や経験について検討したので報告する。

2. 調査方法

2-1. 調査対象

平成21～23年度に「調理文化の地域性と調理科学―行事食・儀礼食―」というテーマで行われた全国規模のアンケート調査である日本調理科学会特別研究委員会のデータベースを基に、関東甲信越地区の調査から男性回答者437名を調査対象者とした。

2-2. 調査期間：平成21年12月～平成22年8月

2-3. 調査内容

①調査対象者の属性項目：年齢、家族構成、住所
②調理担当者、行事や儀礼への影響者
③行事および儀礼に関する認知度と経験
④行事食および儀礼食

3. 結果および考察

表1　対象者の年齢

	男性	
	n=437	%
20歳未満	144	33.0
20歳代	151	34.6
30歳代	8	1.8
40歳代	40	9.2
50歳代	67	15.3
60歳代	12	2.7
70歳代	8	1.8
80歳以上	6	1.4
N.A	1	0.2

表2　対象者の家族構成

	男性	
	n=437	%
同世代	90	20.6
二世代	205	46.9
三世代	92	21.1
1人	41	9.4
その他	5	1.1
N.A	4	0.9

表3　対象者の住居

	男性	
	n=437	%
長野県	114	26.1
新潟県	91	20.8
東京都	47	10.8
茨城県	37	8.5
群馬県	34	7.8
神奈川県	35	8.0
千葉県	22	5.0
栃木県	19	4.3
埼玉県	18	4.1
山梨県	9	2.1
その他	11	2.5

表4　調理担当者

	男性	
	n=437	%
はい	82	18.8
いいえ	352	80.5
N.A	3	0.7

表5　行事・儀礼への影響者

	男性	
	n=437	%
父方	80	18.3
母方	166	38.0
配偶者	41	9.4
その他	10	2.3
わからない	112	25.6
N.A	28	6.4

3-1. 対象者の属性

大学での調査が中心なので、年齢は学生およびその保護者の世代が多かった。家族構成は核家族が多く、三世代は2割程度で、四世代はいなかった。居住区は長野県、新潟県、東京都などが多かった。

3-2. 調理担当者および行事・儀礼への影響者

調理担当者として「はい」と回答した者は18.8%であった。食に関心があって回答に協力的だったとも思われるが、別の調査[3]では、料理を「まったくしない」男性は8%、「いつもしている」男性は7%であり、女性の場合は、若い人は料理をあまりしていないが、年齢が高くなると料理をするようになる。しかし、男性は年齢に関係はみられない、と報告している。

行事や儀礼食への影響について、「母方」38.0%、「父方」18.3%であった。同じ関東甲信越調査[4]で女性の回答は「母方」56.6%、「父方」15.7%、「わからない」13.3%であったのに対して、男性はあまり関心がないのか、「わからない」が25.6%と多かった。

3-3. 行事および儀礼の認知度と経験

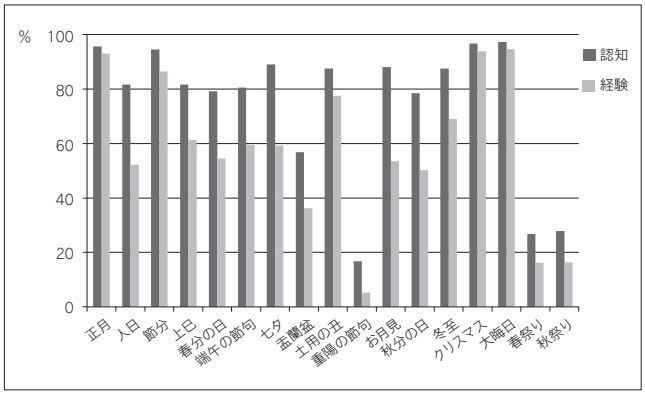


図1　行事の認知および経験

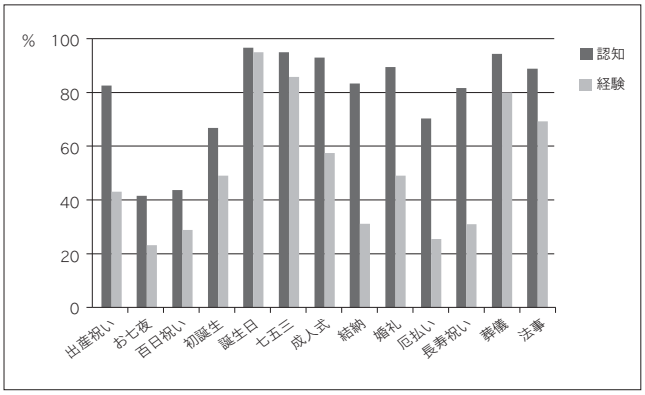


図2　儀礼の認知および経験

行事の認知度は、「重陽の節句」、「祭り」は10 ～ 20%台と低く、「盂蘭盆」56.8%、「彼岸」は8割弱と低かった。それ以外の行事は8割以上と高いが、経験の有無になると、どの行事も認知度よりも低かった。

儀礼については、核家族が多く若い年代では、まだ経験していない場合もあるが、認知度では、「お七夜」、「百日祝い」が40%台で、それ以外は高い認知度だった。子どもが誕生すると子どもに関連する儀礼を若い世代は行うことが、他の調査[5]で報告されている。

3-4. 行事食および儀礼食

食事については、同調査[4]の女性の場合と比べると全体に男性の方が低い割合であったが、正月の屠蘇や赤飯、七夕の赤飯、重陽の節句の菊花酒は、女性より男性の方が高い割合だった。上巳の節句は、白酒、餅菓子、寿司、潮汁のいずれも女性の割合よりも10%以上低い割合だった。

4. まとめ

平成21 ～ 22年に行事食・儀礼食について関東甲信越地区の男性437名にアンケート調査を行った結果は次の通りであった。

男性で調理を行う者は2割以下と少なかった。全体に行事や儀礼の認知度は高いが、経験をしている者は少なかった。また、伝統的な行事や儀礼の食の経験は、男性は女性に比べて低い割合で、50%を下回るものが多かった。私達の調査でも祝いの時には、好きなものを食べるが多く、赤飯は、祖母が作ってくれた時に食べる、という回答がみられた。

5. 謝辞

調査にご協力いただき方々に感謝申し上げます。

6. 参考文献

1）島直子：有職男性の家族意識―性別役割分業意識を焦点として，Sophia Junior College Faculty Journal Vol.30,101-110（2010）
2）拓殖結月：大学生が考える「女子力」とは？－男女間の認識の相違－，2013年度名古屋大学学生論文コンテスト　優秀賞・附属図書館長　受賞
3）中瀬剛丸：料理の楽しさと煩わしさ～「食生活に関する世論調査」から②～，放送研究と調査，66-72（2006）
4）宇和川小百合：家族構成にみる行事食と儀礼食の実態調査，東京家政大学研究紀要第53集（2）39-51（2013）
5）新谷尚紀，波平恵美子，湯川洋司編：暮らしの中の民俗学③一生，吉川弘文館（2003）

Chapter 2-4

健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案

加齢と食事摂取傾向の変化　第２報　経年変化とその特徴

貝原奈緒子 Kaibara Naoko ，木元幸一 Kimoto Koichi

日本人男女合わせた平均寿命は世界一で、それは医療技術の進歩によるところが大きい。しかし、日本的食事の栄養学的評価や和食が世界遺産となり見直されていることを考えると、日本人の生活の総体、中でも食生活を巡る部分に起因するところがある推定されている。今回はその調査研究第２報である。

第１報で述べたように、全人口における65歳以上の人口の占める割合が、日本は23％に達しており世界一となっている[1)]。我が国が、太平洋戦争後如何に大きく変化したのかが知らされる数字である。

平均寿命が伸びすぎたために、健康寿命との差が開き、不健康な期間が他の国よりも長くなってしまうことは、残念なことである。日本人は病院で亡くなる人達が多く、欧米では自宅での看取りが多いという死生観の違いも一因としてあるだろう。私達は前回に引き続き日本人の食生活の特徴を見出すこととした。

先の平成27年度食生活学会で私達は、日本人の加齢に伴う食事摂取傾向の変化をアメリカ人の場合と比較検討し、発表した[2)]。食事摂取量（エネルギー摂取量）というのは、体力の変化と共に推移するのが普通である。アメリカ人の食事摂取傾向は、ほぼそれと一致していた。ところが日本人の食事の中には、総摂取エネルギー量は、体力のピークとほぼ一致していながら、年齢と共に減ることがなく増加していく食事摂取群が存在することがわかり、日本食生活学会に報告した。詳細はここでは避けるが、魚介類、野菜、豆類などである。国立健康栄養研究所から出ている「国民健康・栄養の現状」[3)]からのデータを引用して作図したのが図１である。図１には、魚介類と鳥獣肉の加齢と共に変化する日本人男性の摂取量を示した。20歳代を過ぎると鳥獣肉摂取量は減少傾向を示し、反対に魚介類の摂取量は増えている。日本人の摂取食物群の中で魚介類は、年齢を経ると共に摂取量が増えており、ある年齢で魚介類の摂取量は鳥獣肉摂取量を超え逆転するのである。図１には、平成７年、平成16年、平成25年のデータを示した。図中、魚介類摂取量と鳥獣肉摂取量とが交叉したところを○で示した。平成７年では、30歳代で魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っており、逆転している。平成16年では40歳代で同じ程度になり、50歳代で魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っている。平成25年では、60歳代で魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回り逆転している。図２は女性の場合の魚介類摂取量と鳥獣肉摂取量で、平成７年には30歳代、平成16年には40歳代で同じ程度となり、50歳代では魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っている。○で示した時点が右へ移動しているのは、年々魚介類の摂取量が減少し、鳥獣肉摂取量が増えていることを示している。女性も魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っているのは、平成７年度では30歳代からで、９年を経て平成16年度では40歳代で同数となり50歳代から魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っている。さらに９年後の平成25年度では60歳代でようやく魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回り、この18年で30歳代から60歳代へ移行してきている事になる。このままだと、次の10

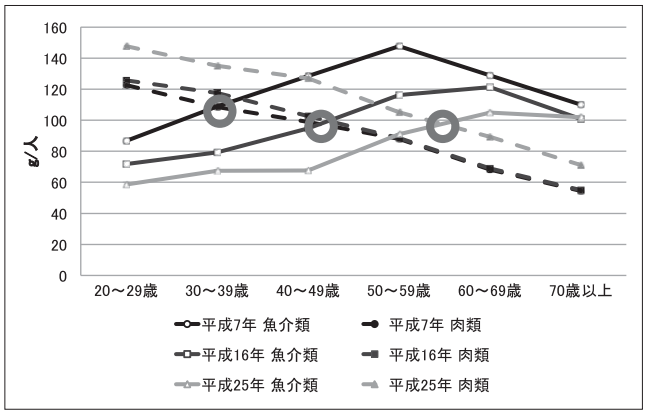


図１　加齢に伴う魚介類と鳥獣肉類摂取量の変化 - 男性 -

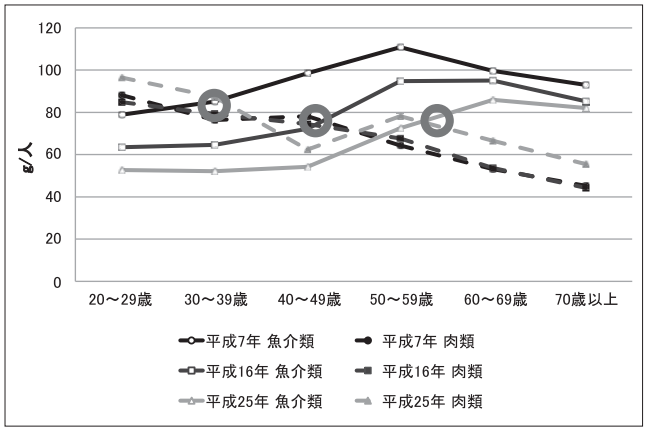


図２　加齢に伴う魚介類と鳥獣肉類摂取量の変化 - 女性 -

年後に全年齢、70歳を超えて鳥獣肉摂取量が魚介類摂取量を上回る可能性が大きい。平均寿命を支えている80歳代の人達は20年前は60歳代、鳥獣肉より魚介類の方を多く摂食している人達と見なされる。魚介類摂取量と鳥獣肉摂取量など食品群別の摂取量について、年齢別区分で同じ形で比較可能なデータが出ているのは平成7年度からでそれ以前のデータがない。そこで、年齢別区分にはなっていないが、現在80歳、60歳、40歳の人達が20歳の時の年度の全国民の平均摂取量を比較したものが、表1である。

表1　60、40、20年前の食品・栄養摂取量（抜粋・編集[1)]）

	1950年	1970年	1990年	2010年
エネルギー	2,098kcal	2,210kcal	2,026kcal	1,849kcal
タンパク質	68g	78g	79g	67g
うち動物性	17g	34g	57g	54g
脂質	18g	47g	57g	54g
うち動物性		20g	28g	27g
魚介類	61g	87g	95g	73g
鳥獣肉	8g	43g	71g	83g

現在80歳の人達は、20歳だった1950年ころ、タンパク質摂取量の1/4が動物性タンパク質で、魚介類を鳥獣肉より圧倒的に多く摂取していた国民である。ところが、60年後の2010年ではタンパク質摂取量はそれ程変化していないが、そのうち動物性タンパク質の占める割合は、1/2以上であり、鳥獣肉摂取量が魚介類摂取量を上回ってきている。鳥獣肉摂取量が、1950年当時の10倍も増えている。その結果ともいえると思うが、脂質の摂取量も3倍に増えている。全体として摂取エネルギー自体はそれ程変わっていない。日本と同じ高い平均寿命を維持している国が全て魚介類を食べているわけではないのでその原因を魚介類摂取量にだけ求めることはできない。沖縄が長寿の県として知られ、食肉を多く摂っていると見られているが、沖縄を含む南九州でも過去には魚介類摂取量が鳥獣肉摂取量を上回っており、鳥獣肉摂取量が逆転して魚介類摂取量を上回るのは1985年頃になってからで、それでも他の地域よりも早く、今は全国的に鳥獣肉摂取量が魚介類摂取量を凌いでいる。また、平成7年では6歳以下の児童で既に鳥獣肉が魚介類摂取量を上回っており、老齢期になってからの幼少期の味への回帰も変化してくるであろう。

日本人の長寿は、日本的食生活の特徴に起因することが、広く認められている。内閣府の平成25年度「高齢期に向けた「備え」に関する意識調査」では、「栄養のバランスのとれた食事をとる」というのが、散歩や休養などと共に70％程度を占めている。このことは、日本人の栄養・健康維持に対する意識の高さを示している。さらに実際の食品を選ぶ段階になると、同じく内閣府の「食育に関する調査」の「食品の選択や調理に対する知識」では、「旬の食材や地域の産物」が60 ～ 80％の人が知識として持っていると回答している。むしろ栄養成分や栄養効果の知識よりも多いくらいであった。栄養のバランスを加齢と共に考えるようになっているばかりでなく、食材の旬や地域性・特産的な知識も混ぜつつ食事というものを捉えていることに改めて驚かせられる。日本が四季折々の旬の食べ物に恵まれ、地域にはその歴史と伝統に育まれた祭りや集会があって、助け合うことが人々の心に残っている。和食が日本人の持つ文化として認められた最も重要なことで、これからも、新しい食の傾向をとり入れつつ改善しなければいけないことである。

参考文献

1）日本人の長寿を支える「健康な食事」のあり方に関する検討会報告書、厚生労働省、平成26年
2）日本食生活学会、平成27年度9月、東京農大、日本食生活学会誌　投稿中
3）独立行政法人国立健康栄養研究所「国民健康・栄養の現状―厚生労働省国民健康・栄養調査報告」より、第一出版、平成7、16、25年度

Chapter 2-5

男女共同参画で行う地域防災・減災

東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討

齋藤正子 Saito Masako ，小櫃智子 Obitsu Tomoko

男女共同参画の視点から地域防災・減災活動の推進を目的に取り組んでいる研究プロジェクトである。本年度は地域防災・減災活動に関する面接調査を継続して行い、狭山市などの総合防災訓練や防災カフェに参加した。これらのことから男女共同参画の視点に多様なセクシャアリティの方々への配慮も含めた地域防災・減災に取り組む必要性が示唆された。

1. はじめに

近年では火山噴火や豪雨による水害など想定を超えた自然災害が多発している。さらに30年以内に約70％の確率で発生するとされる首都直下型地震による被害軽減を視野に入れた地域防災・減災対策の取り組みが各地域で取り組まれている。

そこで本研究プロジェクトでは、地域連携の一環として男女共同参画の視点で地域防災・減災活動を推進することを目的とした。今回は研究プロジェクト３年計画の２年目の報告である。

2. 研究プロジェクトの目的

東京家政大学狭山キャンパスにおける地域防災・減災の役割を検討する。

3. 研究方法

半構成的面接調査を実施し、得られたデータから分析を行った。また、参与観察として狭山市などの総合防災訓練に参加した。

倫理的配慮として当大学の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

1) 平成26-27年度の研究活動について(２年間)

面接調査はインタビューガイドを用いて実施した。

回数は１～２回、時間は60分～120分

(1) 研究対象者の概要

	所属	担当・役割	人数
1	狭山市役所	防災課職員	１名
2	入間市役所	防災・防犯課職員	１名
3	狭山市 NPO	自主防災組織	２名
4	入間市	社会福祉協議会	１名
5	被災地県内大学 (A)	防災担当者と ボランティア担当者	７名
6	首都圏内大学 (B)	防災担当者	１名
7	A 大学と連携する町会 (C)	自主防災組織 防災担当者	２名
8	B 大学と連携する町会 (D)	自主防災組織 防災担当者	１名

(2) インタビューガイドの内容

①東日本大震災および平成27年関東・東北の豪雨被害の対応について②学生のボランティア活動について③災害時の情報収集について④大学と地域の防災活動の連携について⑤男女共同参画で防災・減災に取り組みについて

2) 参与観察：平成27年度

- ➢ 狭山市の総合防災訓練 (平成27年８月開催)
- ➢ 狭山市の NPO と自主防災組織主催の第１回防災カフェ（平成27年７月開催）
- ➢ A 大学が連携している自主防災組織主催の防災訓練 (平成27年11月開催)。

本プロジェクトの１年目の活動を第74回日本公衆衛生学 (平成27年11月開催) にて学会発表を行った。

4. 面接調査の結果

面接調査の結果を「防災・減災の取り組み」、「大学と自主防災組織間の連携」、「地域防災・減災における男女共同参画の視点」、「課題」の4つの視点で質的帰納的分析を行った。

※狭山市・入間市の面接調査については、平成26年度女性未来研究所活動報告書を参照のこと。

1) 防災・減災の取り組み

A大学は災害発生時には被災地にてボランティア活動を実施し、活動を行うためのシステムを構築していた。例えば、被災地へ行き先遣隊を出し、ニーズ調査および活動現場の選定、交通手段、特に安全面の調査を行い、支援活動を開始していた。また、ボランティア活動を学生の授業単位として認定する制度があった。

C町会の自主防災組織では、独自の防災マニュアルを作成し、防災訓練を実践していた。また、災害時相互協力協定を全国の50余りの町会と結び、平時から災害時に備えていた。

2) 大学と自主防災組織間の連携

B大学は20年前から大学設置地域と災害拠点病院、市の防災担当者と連携した地域防災セミナーを開催し、地域の防災リーダー育成講座を行っていた。そのセミナーの運営には大学のボランティアサークルの学生が関わり、学生の災害時の人材育成も行っていた。

D町会の自主防災組織は、この地域防災セミナーの運営に関わり、大学と災害に関する共同研究に取り組み、災害時要援護者支援に対応した避難所や福祉避難所の開設、在宅避難対策に取り組んでいた。

3) 地域防災・減災における男女共同参画の視点

避難所の運営には男性リーダーとともに女性リーダーが欠かせないことが語られた。女性リーダーは生活の視点があり、災害時に支援が必要な要援護者への配慮ができる。そのことを社会に提唱して女性リーダーの人材育成を推進していく。また、男女共同参画の視点だけでなく、多様性のあるセクシャアリティの方々への配慮も忘れてはならない事が分かった。

4) 課題

共通した課題として自主防災組織の担当者の高齢化が進み、新規の担い手となる特に若い人材が不足していることを挙げていたC町会の自主防災組織の人材確保の取り組みとして、中学、高校の役員にそのまま入ってもらうことを行っていた。

C自主防災組織の防災担当者への面接調査

5. 総合防災訓練や防災カフェに参加して

狭山市の総合防災訓練に研究プロジェクト員1名と大学生4名が参加した。この訓練では避難者名簿作成、炊き出し訓練を行った。その際には行政、地域の住民、中学生、赤十字奉仕団の皆様と活動した。参加した学生は狭山市在住でないことや在住の総合防災訓練自体に参加することが無かったため防災訓練の意義や地域連携について学ぶ機会となった。

狭山市総合防災訓練にて活動する大学生

狭山市の自主防災組織が防災カフェに研究プロジェクトが1名参加した。そこでは女性がリーダーとなり、平時からの備えとして防災食の試食や今後の活動について話し合われていた。これらの訓練やカフェに参加することで地域の防災力を知ることができた。

C自主防災組織の総合防災訓練では、A大学のボランティアサークルの学生が地域の子どもたちを対象とした防災カルタや防災すごろくを行い、遊びながら防災教育を実施していた。地域での防災訓練に参加する際の参考になり、当大学でも積極的に防災訓練などに参加していきたい。また、今後は他大学との学生ボランティア活動を行うことも検討していきたい。

6. おわりに

今年度の研究活動により、それぞれで取り組んでいる防災活動やボランティア活動システムが理解できた。これらを参考にして狭山地域の特性や地域の防災力を生かした、平常時から地域防災・減災に取り組むことが重要である。その取り組みは男女共同参画の視点とともに多様なセクシャアリティの方々への配慮も含めた地域防災・減災に取り組む必要性があることが示された。

来年度は今まで実施した面接調査の対象者を交えた報告会を実施し、狭山キャンパスにおける災害時の役割を明確にする。さらに大学全体で地域の防災力の向上を推進していきたいと考える。

Chapter 2-6

本学園アーカイブス

校祖渡邉辰五郎と女子教育：裁縫教育が与えた人生の歩みへの影響

吉村扶見子 Yoshimura Fumiko ，太田八重美 Ota Yaemi ，
務臺久美子 Mutai Kumiko ，木元幸一 Kimoto Koichi

今回は、昨年度の校祖渡邉辰五郎の功績（女子教育）報告からさらに焦点をしぼり、裁縫教育を通しての教えについてまとめる。教えは、卒業生のその後の人生･生き方にどのような影響を与えたか、卒業生の声を中心に報告する。

1.「渡邉辰五郎君追悼録」（私立東京裁縫女学校明治41年5月発行）より

一寸の針に志を立て、一丁の鋏に身を起し、以て斯道（しどう）の大業を成就し不朽の芳名を殘せるは、故渡邉大人なり。（以下略）

上記の文は、明治40年5月26日東京裁縫女学校校長渡邉辰五郎が逝去し、翌年に出版された追悼録の中からの抜粋である。記したのは、当時の教員である常盤大定（のちの東京大学教授）で校祖辰五郎を如実に現している。

ほかに、その功績を大きく讃える哀悼文として以下を紹介する。（一部抜粋）

校祖 渡邉辰五郎
弘化元（1844）年～明治40（1907）年

誄辭　　文學博士　那珂通世

君が郷里長南町の小學校で裁縫を教へて御出での時に、今の山形縣師範學校校長江尻庸一郎君は鶴舞小學校の首席訓導となられまして、君が裁縫教授の熟練なことを聞いて、明治11年に、鶴舞へ呼寄せて、教授を御頼みになりました。その頃裁縫の教方は都も鄙も推なべて、順序もなく、課程も定まらず、仕立屋の仕事場と變りがございませんでしたが、裁縫科とても、多數の生徒を集めて規則正しく教へられると云ふことは、君の教方で明かになりました。

その年千葉師範校長、即私が學校の隣に女子師範學校を設けまして、裁縫の教師には君を鶴舞から御呼び申ました。その女學校は、生徒も幼く、教師も未熟で、何事も不行届でございましたが、裁縫の一科だけは、君の御蔭に由つて、慥に天下に秀でた物となりました。

私が、東京女子師範學校に轉じまして後、君の様な才能のある人を田舎に殘し置くことの惜さに、千葉の學校には御氣の毒でしたが、君を東京へ呼出して、明治14年5月から、官立學校の教師と致しました。それからして君の教授法は四方に赴任する師範卒業生の手によって、全國の女學校に廣まりましたことはどなたも御存じの事でございませう。

その他、各方面からの哀悼の意が寄せられており、校祖辰五郎の功績への評価の高さが現れている。

2. 辰五郎の女子教育の歩み

明治14年、東京女子師範学校て教鞭をとっていた校祖辰五郎は本学の前身となる「和洋裁縫伝習所」を本郷区湯島に開設する。

和洋裁縫伝習所　明治14年～明治25年

明治19年、東京女子師範学校を辞職し、宮川保全の提唱に賛同した那珂通世らの同士29名の発起人とともに「和洋裁縫伝習所」内に「共立女子職業学校（現共立女子大学）」を創設する。その後、明治25年には独力で「和洋裁縫伝習所」を改編し東京府認可の「東京裁縫女学校」を設立する。

東京裁縫女学校 明治25年～大正11年

この女学校は、専門の裁縫科教員養成校としての従来の教員教養必須科目（和洋裁縫・礼法・点茶・生花・刺繍・造花等）以外に修身・教育・家事・習字を加えており一般教養を身に付けた女子教育を目指していたことが分かる。明治32年には生徒数増加（800名）のため本郷区東竹町へ校舎移転する。（巻末表参照）

明治42年、校祖渡邉辰五郎翁逝去。長子渡邉滋が校長に就任。明治44年には高等師範科卒業生に対し無試験検定を以て、裁縫科中等教員免許状を取得できる特典を付与される。

（1）卒業生の声

創立90周年を期に昭和45年から54年にかけて録音された「卒業生の声」というテープが東京家政大学博物館に保存されている。明治から昭和初期ごろの卒業生が当時の授業内容や寮での生活などについて思い出を語っている。

その中から辰五郎の教えに関する部分を一部抜粋し紹介する。引用にあたっては、読みやすさを考慮し、内容に影響しない範囲で言い回しを変えている。

①努力と工夫

・牛込ちゑ（東京裁縫女学校　明治39年卒）

学生の頃、辰五郎先生は生徒のためにご自分の経験談をお聞かせくださったり、質問しますと即座にいろいろとお答え下さいまして非常に有益な楽しみな時間でございました。

その時伺いましたひとつのお話を申しますと、先生が仕立て職のところでご勉強をなさっていたときに、浴衣を一日25枚お縫いになったとの事。

「どうして25枚も縫えるのでございましょうか」と伺いましたら、「それはねえ、人がやるのと同じことをやっていたら、やっぱり人と同じことしかできはしないよ。だから私は夜、床へ入るときに糸と蝋を持って入って、床の中で糸に蝋をひいて巻き返しておいた。そうしておけば、糸がもつれるということがないから、人よりも早くできあがって枚数が多くなるわけだ。」というお話でございました。

その、「人と同じことをしていたら、人と同じことしか出来ないよ。」このお言葉は、今でも私の座右の銘として及ばずながら先生のご精神にならおうと努めている次第でございます。

②向学心へのすすめ

・牛込ちゑ（東京裁縫女学校　明治39年卒）

大正の末に地方の学校を辞めて母校に帰って参りました。間もなく、アメリカへ留学するようにと校長先生（滋氏）からお話がありました。「私は英語ができないですから駄目でございます。」と言ってお断りしましたが、「手ですることだもの、英語ができなくたって見ていればわかる。だから行っておいで。」そうおっしゃいました。

私は「子どもが物理学校（理科大）へ入学しましたから、その監督にと思って東京に帰ってきたので、子どもを置き去りにして行くということはどうも心配です。」と言うと「大丈夫だよ。家へ預かってもいいよ。」とまで仰ってくださるものですから、もうこの上はお断りができないと思いまして、子どもは物理学校の先生のところへお預けして、昭和３年の８月に横浜から、ロンドン丸という船で出かけました。

③倹約・本当のお金の使い方

・千葉米（東京裁縫女学校　明治44年卒）

私は針をそろえるため、辰五郎先生の奥様の売店へ針を買いに参りました。「ひと包みくださいませ。」と申し上げましたら、「なんですか、針で縫うのは１本で縫うんじゃないですか！そんなにひと包みなんて、あなた方は粗末にしていけないから、４、５本しか売ることはできない！」と仰る。これだけの大きな学校になっているのに、こういう本当に尊いお考えをなさる。また、生徒にもそう言って聞かせなさる。針を大切にしなければならん。そして出すべきところへはパッと大きくご寄付を

なさったように承る。

④技術の習得の厳しさ

・安谷ふじゑ（東京裁縫女学校　大正５年卒）

１年の入学当時は人数が多くて小講堂のような教室におりました。それが、夏休みが終わって行ってみますと半数以下になっておりましたのでびっくりいたしました。その後もだんだん減って卒業は40人に足りなかったと思います。この頃、日本の学校ではよく入学が出来たらもう卒業できるのは当たり前だというふうに言われておりますが、この学校ではそれはできなかったので、やっぱり１人１人が勉強してそして、卒業する力ができた時でないと卒業できなかったように思います。

１年のころ、毎日運針をさせられました。約90㎝位のさらしを二つに折って赤糸で縫いました。皆さん１時間に40数本縫えますのに、私は10本足らずしか縫えなかったんじゃないでしょうか。それに点数がついて返って参りますが、ある日これ以上できないと思うくらい一生懸命縫った血のにじんだ運針布に48点がついてまいりました。勿論100点満点です。１年の夏休みの前でしたが、これではとてもあかんと思って、休み前でも仕方がないから帰りましょうと悲壮な覚悟をいたしましたら、お隣のＭさんが「あなた何点ですか、私こんなのよ。」と無邪気に出されたのを見ましたら、10と書いてあり「0が１つ足りませんよ。」とありました。あ、私よりまだ下がいた、それではもうひと踏ん張りやってみましょうと思ったのを覚えております。

・澤木ふじ江（東京裁縫女学校　大正11年）

入学して、細目一覧表を頂きました。これには１年間の作品名、予定時間などが記入されておりました。少しでも正しくできていなければ直されて、正確でなければ、また返されたりして、品物を仕上げるまでは容易なものではありませんでした。

「お直し」があったりしますので、細目を進めるにはいつも時間をたくさんとられて、一方においては、当日の学科の速記をして、その日の整理をするのに、土日などといっても、大空をあおいでのんびりするなどという時間は私にはありませんでした。

１年を２学期にわけてありまして、60点以上無くては進級もできないので、試験などの時は入浴などを控え、実地試験の時などは未製品に終われば点は半減されますので、厳格そのものでしたが、卒業して、楽しかったこと、苦しかったことがしみじみと思われます。その厳しかったことによって、自信を持ち、就職してからは、そのありがたさが格別のものでありました。

教授細目　大正14年改訂　和服普通部

⑤裁縫教育と理数系教養の関連と必要性

・鈴田妙子（東京裁縫女学校　大正９年卒）

滋先生との初出会いは、大正６年４月、入学式の前日に、入学する同級生の兄さんに伴われて、校長先生にお目にかかりました。田舎の校長先生しか存じませぬ私は、お若くて、ハンサムな先生にお目にかかり、びっくりしました。校長先生は開口一番、「本学校は裁縫の技術に関する教育が第一目的ではあるが、入学を許可する場合には、高等女学校時代の裁縫の成績は問題ではない。それよりも大切な事は、数学・理科の成績が悪いと、今後三年間みんなについていけないし、また本人の成績も伸びないので、かような生徒には、入学許可をしない方針だ」とはっきり申され、裁縫が得意でなかった私は、心から喜び、且つ安心いたしました。その折に、滋先生は、入学後の心構えや、勉強の方法などについても、要領よくご注意くださいました。

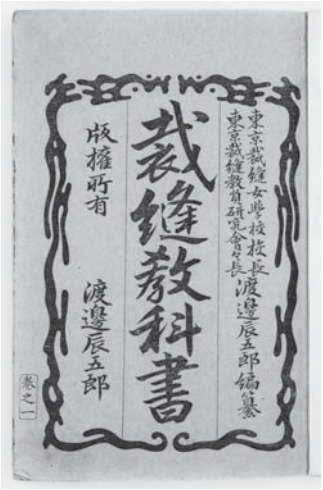
辰五郎と滋　卒業記念写真より　明治37年

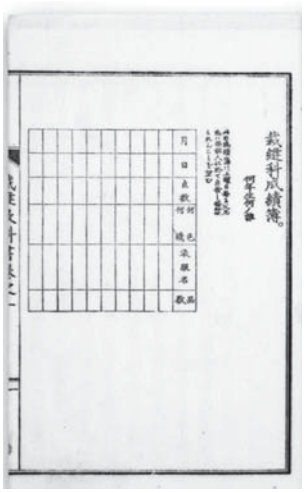
・今村　房（東京女子専門学校　昭和３年卒）

お友達と、先生のご講義中にちょいちょいいたずらをしたりすることはよくございました。非常にご講義が難しいのです。心理学とか哲学とか。本当に試験のためにノートだけ一生懸命にとっておいて丸暗記をして試験場へ出るというような状態でございました。美学、心理学、哲学、難しい経済学とか全科目、大学から立派な講師の先生が来てご講義いただくのですが、なかなか頭に入りません。試験の前々日くらいから丸暗記をして、でもやはりそういうものが基礎になって現代の私どもの生活に大いに役に立っていると思います。

(2) 裁縫科成績簿

明治30年発行の「裁縫教科書」全３巻には裁縫科成績簿が１巻中ほどに綴じられている。この成績簿には、氏名欄、月日、点数、何色何織、衣服名、品数の項目があり、注意書きに「この成績簿は土曜日毎に父母或いは保証人においてて検し捺印せらんことを望む」と記されている。この「裁縫教科書」は、裁縫教育の指導書として工夫された構成となっている。





渡邊辰五郎「裁縫教科書」 明治30年

3. 総括

昨年度（平成26年度）の報告を受けて、今年度は「校祖渡邊辰五郎と女子教育」について文献及び音源の調査を実施。結果として、明治期における女子教育の必要性をいち早くとらえ、私立の職業主義系列の女子中等教育学校を設立した状況とその女子教育の効果の一端を捉えることができた。厳しい裁縫教育をとおしての女子教育が女性の自律へと繋がるべく、学生に対しての深い愛情の基に裁縫技術・裁縫教育指導法の創意工夫や勤勉さの重要性について身をもって説いた校祖の功績は多大である。教えを受けたそれぞれの卒業生の活躍は、「自主自律」そのものを社会に示している。今後、校祖の女子教育がどのように本学園の発展へと繋げられるのか検討を行いたい。

表　明治期における高等教育機関の学生数について

＊空欄は数値不明

		和洋裁縫伝習所 東京裁縫女学校 （現東京家政大学） ＊1	東京女子師範学校 （現お茶ノ水女子大学） ＊2
明治23年	入学者		20
	学生数	80	86
	卒業生		21
明治31年	入学者		61
	学生数	400	176
	卒業生		
明治32年	入学者		88
	学生数	800	202
	卒業生	103	54
明治36年	入学者	800	107
	学生数		
	卒業生	236	105
明治38年	入学者	869	106
	学生数	899	
	卒業生	351	87
明治40年	入学者	784	136
	学生数		
	卒業生	368	122

出典

＊1 入学者数：『文部大臣認定私立東京裁縫女学校一覧』
創立満三十年記念会、明治44年
学生数・卒業生数：『渡辺学園百年史』、昭和56年

＊2『文部省年報』各年度版

Chapter 2-7

60年代型団地における女性たちの「物語」と「21世紀型互助」～「相談拠点」「地域の縁側」の新機能による地域変革を求めて～

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」都会の限界集落から見える「未来」

松岡洋子 Matsuoka Yoko ，齋藤正子 Saito Masako ，米澤純子 Yonezawa Junko,
和田涼子 Wada Ryoko ，宮地孝宜 Miyachi Takayoshi ，井上俊哉 Inoue Shunya

高齢化が50%を超える都内団地の暮らしの実態を明らかにしてソリューションを住民の方々とともに模索することを目指して、定性調査と定量調査のトライアンギュレーションを実施した。さまざまな課題が浮き彫りにされたが、住人は長期居住者が多く、団地をこよなく愛して永住を希望し、行政だのみではなく、互助の意欲もあることが明らかとなった。

はじめに（目的）

日本の高齢化は26%を超えて世界でも稀に見る速度で高齢化の道を急進している。高度経済成長期の向都離村の結果、これまでは地方の高齢化が顕著であったが、今後、高齢化は都市の問題となる。

そんななか、戦後の住宅不足を背景として高度経済成長の時代に至るまで、都会に、寝食分離・ＬＤＫ文化を特徴とする「団地」が形成されていった。そうした団地では、現在高齢化が50%を超え、日本の未来を先どる形でさまざまな問題が噴出している。

このプロジェクトでは、東京都内のそうした団地のひとつに焦点をあて、実態を捉えてそのソリューションを住民とともに探るアクション・リサーチを企画した。目的は、地域の問題として団地の実態を定量的・定性的に明らかにすること、その実態を踏まえて住民とともにソリューションを探ることである。

Ⅰ．プロジェクトの概要

(1) プロジェクトが生まれた経緯

とくにこのプロジェクトは、樋口恵子所長が2015年度のプロジェクトに求める要素として「社会貢献、学生参加」というキーワードを与えて下さったことがきっかけとなっている。プロジェクト代表である松岡（人文学部教育福祉学科）のゼミが24名という大所帯となったことも手伝って、これを核に全学的な学生参加の広がりを実現できれば、と思ったのである。また、市ヶ谷の地で訪問看護師として40年以上地域の在宅生活を支えてこられた秋山正子さんより、かねてからお声掛けもいただいていた。「『暮らしの保健室』を運営しているけれど、立地する団地の悉皆調査をして全体像を把握する必要がある」というのである。

(2)「暮らしの保健室」との共同プロジェクト

そこで、本研究は、「暮らしの保健室（室長秋山正子氏、看護師）」との共同プロジェクトとして、学生参加を呼び掛けて進めることとした。

暮らしの保健室は、新宿区市ヶ谷で訪問看護をしてこられた秋山正子さんが、空き店舗を活用して2011年に開設されたものである。「学校に保健室があるように地域にも気軽に来られる保健室を」という趣旨で看護師による健康面から心理面、社会面にいたる総合的な相談に応じておられる。アンケート配付やイベントの告知チラシなどの配布もここを拠点に行った。

このプロジェクトの存在と活動を知らせるために、ピ

「暮らしの保健室」との共同プロジェクト

ンクのＴシャツを作った。団地には若者たちの「ピンクの風」が吹き、秋を過ぎる頃には「団地に若者が入ってくれてうれしい」「がんばってね！」という声を聴くようにもなった。一方で、悪質な訪問販売が跋扈しているために、不審がられて注意を受けたこともあり地域で活動することの困難さを感じたりもした。

このように、このプロジェクトは団地住民の方々とともに進め、ソリューションを求めて、よき資源を創り出すというアクション・リサーチであることを最初に伝える。

また、このプロジェクトは2015年度スタートしたため、2016年度までの２年間プロジェクトである。

地域に働きかけることはいわば永続的な営みであるので2016年度以降も継続することを前提として、まずは、2015年を「地域になじみ、地域を知るための調査の年」とした。2016年は、「未来を考え地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」となる。

(3) 2015年の活動

団地における暮らしの実態、住人の思いなどを多角的に探るため、定性調査と定量調査を組み合わせるトライアンギュレーションとした。図１にその流れを示す。

Ⅱ．プロジェクト活動の内容と調査結果

全体の流れにそって、内容を述べていく。

(1) 立上げ記念講演(2015年6月17日)

団地近くの地域密着型高齢者施設「マザアス新宿」に

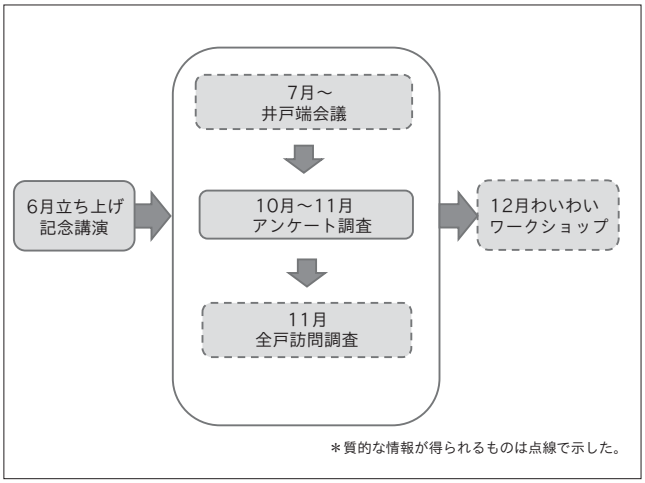


図１　プロジェクトの構成と流れ（2015年）

て立ち上げ記念講演を開催した。基調講演を樋口恵子所長に依頼した。住人の方のみではなく、新宿区役所、新宿区社協、保健センター等行政機関からの参加も含めて70名を超える参加があった。

(2) 井戸端会議(計５回)

住民の方に「暮らしの保健室」に集まっていただき、グループに分かれて「戸山ハイツの魅力」と「暮らしの課題」について自由に話し合った。人数が多く発言が偏る可能性があったため、ポストイットに書き模造紙に貼っていくワークショップ形式とした。松岡ゼミとの相乗りとし、書きづらい方には学生のサポートをつけて全員参加を心がけた。第３回以降は、口頭での話し合いとなった。

５回の井戸端会議（暮らしの保健室）

開催日と参加人数

第１回（7/7）17名、第2回（7/14）９名、第3回（9/28）７名、4回 目（10/19）５名、5回 目（11/16）５名の参加者があり、のべ44名の方からさまざまな意見が寄せられた。

結果

得られた情報は、「一人暮らしと高齢化の不安」「孤独死・認知症の人の問題」「男性の閉じこもり」「高齢化による自治会消滅」「交流の不足」「子供・若者がいない」「坂が多くて大変」「エレベータなしで大変」「マナーの悪さ」「どこに相談していいか不明」など、およそ9カテゴリーに分類することができた。

戸山ハイツの良い点としては、「歴史ある土地柄」「交通・買物に便利」「自然環境がよい」「病院が近い」などが挙げられた。これらの情報は、アンケートの質問項目として展開し検証することとした。

(3) アンケート調査

調査デザイン

調査デザインは以下のようである。東京家政大生が4000票のセット封入を行ない、団地の一戸一戸を訪問してドアポケットに配布した。

調査対象：戸山ハイツの全戸（3400戸）における世帯内の最高齢者（最高齢者が回答できない場合は、家族等による代替を依頼、連絡により学生・教員による支援を受け付けた）

配布時期：調査票配布10月14日～18日、回収11月9日～25日（締め切りは11月11日）、督促チラシ配布11月8日

配布方法：全戸配布留め置き（一部地区では、棟自治会長を通じての手渡し）

回収方法：3方法より選択（返信用封筒で郵送、「暮らしの保健室」へ持参、電話で回収を依頼）、安否確認を兼ねた訪問でも一部回収した。

結果

1069票の回答（回収率：33.9%）を得ることができた。無回答部分のある票も一部見られたが、票数も多いことから、SPSS補助機能が使えると判断し全てを有効回答とした。

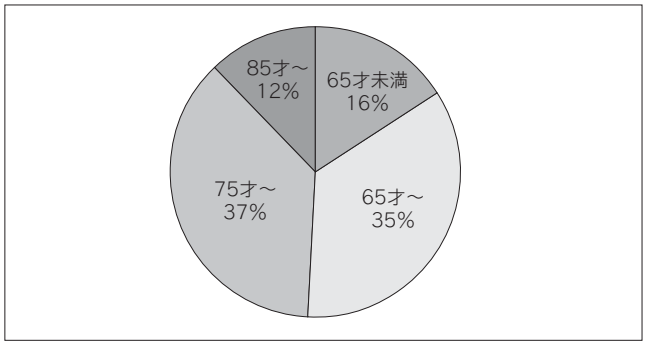
特筆すべき点を以下に記述し、考察を加える。

① 回答の半数は75才以上の後期高齢者

戸山ハイツがある戸山2丁目は高齢化率52.2%（平成27年12月、新宿区住民基本台帳）と限界集落の様相を呈している。回答はその人口構成をよく反映しており、回答者平均年齢73.4才、最頻値80才、最高齢者98才であった。

回答者の84%が65才以上であり、約半数が75才以上である。

② 女性67%、男性33%



グラフ1　回答者の年齢構成

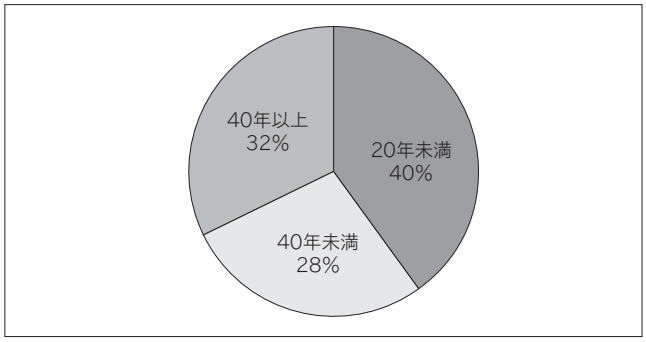
性別では女性67%・男性33%であった。65才～84才では女性は63%前後であるが、85才以上では突出して女性82%であった。

③ 独居、二人世帯（90%）が多い（全国平均64%）

単身（41%）・二人世帯（47%）の多さが際立った。全国平均（平成22年国勢調査）ではそれぞれ30%・34%である。とくに、85才未満では二人世帯がボリューム類型であるが、85才以上だと独居が最多で半数を超えている。

④ 回答の半数は30年以上の長期居住者

居住年数の平均は26.4年、最頻値40年、最少は数か月で最長は68年であった。20年未満が最も多く、40年未満、40年以上で二分する形である。



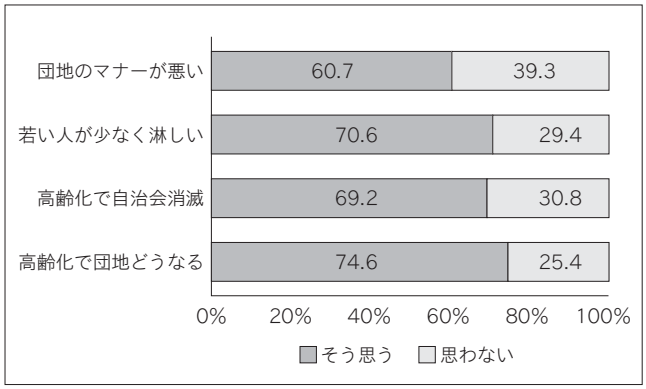
グラフ2　居住年数

戸山ハイツは戦後間もない1949年平屋住宅が建てられたのが最初である。68年間の居住は、そのころからの居住者であると推察できる。井戸端会議でも「平屋の頃から住んでいる」という方が参加されていた。

⑤ 課題が多い中で希望ある意見が

「将来への漠然とした不安（65.7%）」や「このまま倒れたらどうなるのか（55.7%）」といった不安があること、「団地のマナーが悪くなっている（60.7%）」「若い人が少なく淋しい（70.6%）」「認知症の人を見かける（29.5%）」「坂が多くてたいへん（25.6%）」といった課題があることが明らかとなった（数値は「あてはまる」「少しあてはまる」の合計）。

一方で、「戸山ハイツが大好き」「住み続けたい」がそ



グラフ３　いろいろな課題が・・・

れぞれ約90％と非常に高く、課題に対する考え方として行政に期待しつつ、「助け合いできるといい（86.9％）」「住民が力を合わせて（89.9％）」と互助のポテンシャルが十分にあることが確認できた。

「自分のこと・介護のことで限界（14.1％）」という厳しい現実も少なからずあることは見過ごすことができないであろう。

⑥　自由記入では多様な意見

自由記入では、井戸端会議で出された意見が重複する形で見られた。井戸端会議で見られなかった特筆すべきものとしては、以下のものがあった。

- 老々介護の真っただ中で余裕なし
- 号棟の方が良くしてくださり、有難い
- 若い人の入居を促進してほしい
- 話し相手がほしい
- 長年仕事をしてきたので仕事がしたい（多）

特に希望としては、「交流の場がほしい」「仕事がしたい」「ボランティアにも参加したい」等が目立った。

（4）全戸訪問

安否確認を兼ねた全戸訪問は、学生と教員で行なった。リスクを考えて、２人以上で訪問することとした。井戸端会議、アンケート調査では知り得なかった実態が見えてきた。主な点を挙げる。

- さらなるアウトリーチが必要（無年金の方、老々介護による疲弊、虚弱高齢者
- 介護保険へのアクセス確認
- 精神の病で苦しんでいる方
- ゴミ屋敷（訪問は控えた）等
- ゴミ屋敷まではいかずとも、掃除不足で衛生面での心配　など
- 「閉じこもりの人が多い」という声（特に男性）
- 障がい児がおられる家庭で交流を求める声
- 古くからの居住者間では訪問し合う絆も残存

（5）「わいわいワークショップ」

12月21日（月）に、戸山シニア活動館にて「わいわいワークショップ」を開催した。保健センターの担当者、地域包括支援センター長等を含む17名の参加があり、４テーブルに分かれて茶菓を楽しみながら話し合った。

まず、団地で「困っていること」「欲しいもの」を挙げ、つぎに「もったいないこと」「余っている資源」を出し合う。それらを結合させて「事業」をみんなで考案するものである。次のような「事業」が提案された。４グループの共通項は何らかの「交流の場」であった。

- 「カフェ」「サロン」など（6案）（移動販売＆相談、ビアガーデン、リサイクルなど）
- 「助っ人参上！」
- 「戸山ハイツ・コミュニティバス」
- 「腐葉土で利益還元（戸山ハイツの落ち葉利用）」

Ⅲ．まとめと次年度への抱負

戸山ハイツは1960年代、1970年代に建設された団地で、決して新しくはなく十分に広くもない。住戸の老朽化も確認できた。しかし、住人の方が独立住宅において「その人らしく」暮らしておられる姿に触れて、改めて住宅の力、在宅の力を感じた。戸山ハイツを愛し、ずっと住み続けたい、助け合いもしたいという気持ちがあることも確認できた。しかし、実に多様な課題があることも見えてきた。

2016年度も井戸端会議を継続し、「命のバトン」づくりや料理教室（戸山シニア活動館）をスタートして、住民の中からアクションが生まれるよう支援を続ける。

「暮らしの保健室」は2011年の開設以来4年となる。しかし、このプロジェクトは住人の方にとっては初めてのものであり、立ち上げ講演会を知らせるにもチラシによる告知が主体であった。学生たちは頑張り、ある学生は50回以上戸山ハイツを訪問した。チラシ配布、アンケート配付も含めると全戸への配布回数は9回となる。延べ3万戸への配布である。

一年間の活動を通して「暮らしの保健室」の皆様方をはじめ、民生委員様、各地区の自治会長様、各号棟の自治会長様、本当にありがとうございました。また、学生達の頑張りにも敬意を表します。

＊調査にあたっては、東京家政大学倫理審査会に諮った上で進めた。

Chapter 3

男女共同参画講座

地域支援・交流の一環として、男女共同参画社会推進のため、各地方自治体（平成27年度は「板橋区」「北区」「群馬県」）の要請にこたえて、以下3件の共催事業（講座企画、内容の助言、講師派遣など）を行った。

1 東京都板橋区　いたばしIカレッジ前期（全5回）
　講師：伊藤節 / 樋口恵子 / 西山千恵子 / 小林緑 / 手嶋尚人
2 東京都北区　さんかく大学（全5回）
　講師：三ツ谷洋子 / 梅谷千代子 / 北田和美 / 樋口恵子 / 笹川あゆみ
3 群馬県　とらいあんぐるん　大学連携講座（全4回）
　講師：伊藤節 / 志尾睦子 / 西山千恵子 / 小林緑

Chapter 3-1

板橋区　いたばしＩ（あい）カレッジ前期（全５回）

「戦後70年、女と男の歴史と文化」

【東京都板橋区・東京家政大学共催事業】
期　間：2015年9月25日～10月29日、木(金) 曜日、14:00 ～ 16:00　　定　員：40人
講座名：近代の少女小説と社会 / 日本の家族と戦争 / 描く女・描かれる女 /
　　実はたくさんいた女性作曲家 / まちづくりにおける男女の役割

【講師】

伊藤節
（東京家政大学教授
　女性未来研究所副所長）

樋口恵子
（東京家政大学名誉教授
　女性未来研究所長）

西山千恵子
（青山学院大学非常勤講師）

小林緑
（国立音楽大学名誉教授）

手嶋尚人
（東京家政大学教授）

いたばしI(あい)カレッジ　前期　保育つき

東京家政大学との共催で、５回の連続講座を開催します。戦後 70 年という大きな節目を迎え、さまざまな歴史と文化を切り口に、男性・女性という性別のあり方を見つめ直してみませんか？
各回、様々なフィールドで活躍中の講師を迎え、興味深いお話をしていただきます。

男女平等参画基礎講座
『戦後７０年、
女と男の歴史と文化』

東京家政大学
共　催

【前期カリキュラム】

	と　き	講 座 テーマ	講　師
1	9月25日（金）	近代の少女小説と社会 ～“少女”の誕生をめぐって～	伊藤　節 東京家政大学 女性未来研究所副所長
2	10月2日（金）	日本の家族と戦争 ～ジェンダーをすすめた戦時体制～	樋口　恵子 東京家政大学 女性未来研究所長
3	10月15日（木）	描く女・描かれる女 ～美術とジェンダー入門編～	西山　千恵子 青山学院大学 非常勤講師
4	10月22日（木）	実はたくさんいた女性作曲家 ～クラシック音楽の常識を覆しましょう～	小林　緑 国立音楽大学 名誉教授
5	10月29日（木）	まちづくりにおける男女の役割 ～現在と未来　台東区谷中を事例として～	手嶋　尚人 東京家政大学 造形表現学科教授

日程　平成27年9月25日 ～ 10月29日（14：00 ～ 16：00）（全5回）
会場　グリーンホール2階　男女平等推進センター「スクエアー・I（あい）」会議室
対象　区内在住・在勤・在学で、原則として全日程受講できる方
定員　40人（申込順）
費用　無料
申込　8月24日（月）朝9時から、Eメール・FAX・往復はがきで
　　お申し込みください。※申込方法の詳細は、裏面を参照してください。
保育　4ヶ月から未就学までのお子さんをお預かりします（定員６人・申込順）
問合せ　板橋区総務部　男女社会参画課　男女平等推進係

近代少女小説と社会
～〝少女〟の誕生をめぐって～

伊藤節　Itoh Setsu

戦後70年という節目にあって、さまざまな歴史と文化を切り口に、男性・女性のあり方を見つめ直すという企画である。全5回の第1回目となる本講座は、少女小説、特に〝少女〟の誕生と、国家政策そして社会、文化との関係を考えようとするものである。

そもそも周縁文化に位置づけられ、男は読まない少女小説とは一体何なのだろうか。その定義は曖昧である。時代によっても、テーマによっても地理的環境（国別）によっても変わってくるからである。おおざっぱにいえば、少女を読者として想定された小説であり、欧米では「家庭小説」とも呼ばれている。孤児少女が他人の家（共同体）で、つらい目にあいながら、将来のよき母になるよう代理母によってしつけられる物語である。

産業革命から始まるイギリスの近代資本主義社会においては、家と職場を切り離し、働き手の男は外部の職場へ、女性は家という領域分離、ジェンダー役割の固定化が進行する。19世紀初めには母性を称揚し、家事や育児を指南するいわゆるトラクト本の氾濫という現象が起き、女性は家庭へと囲い込まれる。特にボーア戦争（1899～1902）や第一次世界大戦後、母の役割が強化される。家庭、家族像の変容は、それが国家による管理と規制の対象となることと軌を一にしているのである。

『若草物語』（1868）、『秘密の花園』（1911）、『小公女』（1905）、『あしながおじさん』（1912）、『赤毛のアン』（1908）といった戦後日本に紹介される人気少女小説のほとんどはこうした時期に書かれているのである。

ところで日本の場合は、欧米諸国に追いつくため、近代的母親像作り、すなわち国民を生み育てる母の教育が必要とされ、1899年（明治32年）高等女学校令が公布される。高等女学校（実際には男子にとっての中等教育）が全国に次々と設立される。このような環境において女学校を舞台に〝少女〟時代が生まれるのである。良妻賢母の準備期間であり、大人、母になるまでの3～4年という猶予期間が制度的に成立するのである。ここに幼女でもなく、女でもない〝少女〟というカテゴリーも誕生する。

加えてこの頃、学校教育を補うものとして出されていた雑誌『少年園』、『少年世界』から、男子の存在を確固とするために、〝少女〟が切り離される。このジェンダー化によって皮肉にも〝少女〟が独立した存在となり、可視化される。〈少女〉専用の雑誌の創刊ラッシュが生まれ、明治30年代（1897～）は少女雑誌の時代となる。『女学世界』、『少女界』、特に『少女世界』、『少女の友』は昭和に入っても続いていく。こうした雑誌を舞台に少女を主人公とした物語が書かれるようになり大正期以降の〈少女小説〉の系譜に繋がっていく。

吉屋信子の『花物語』は近代日本の少女小説の起源ともなっている。また少女雑誌に付与された挿絵は、日本独自の少女小説及び少女文化の誕生に大いに寄与するのである。

投稿欄を通じた読者間の交流のネットワークが拡大し、女性たちは自己表現の場を獲得していき、読書する女性の集合体が出版情報主義の波に乗って広がっていった。この時期から女性運動家も育っていったのである。国家統制の網の目に組み込むはずの女子教育の現場からこのような不思議な現象が起きている。

敗戦後から50年代の少女像はアメリカン・ライフという西洋風の豊かな生活という衣装をまとい、消費社会のイメージを通じて、民主主義、自由を伝えていった。男女は平等といいながら、女はあくまで主婦のなることが求められた。その後の〝少女〟は、少女漫画、ジュニア小説、80年代全盛のコバルト文庫、少女小説のDNAを備えた女性作家の作品を通じて変遷していく。それは女のプライムタイムとしての母を超えたロールモデルを探す軌跡ともとらえられる。

日本の家族と戦争
～ジェンダーをすすめた戦時体制～

樋口惠子　Higuchi Keiko

戦争の中の結婚風景

私は1932年（昭7）生まれ。女の子のしつけは何よりも「素直、従順」であり目標は「良妻賢母」。少女たちの未来の夢は「お嫁さん」になることだった。

だが、その「お嫁さん」像にも、戦争は大きく影響を与えた。満州事変（1931）、日中戦争（1937）、太平洋戦争（1941）、ラジオを通して流れる歌謡曲（1939）の題は「愛馬花嫁」、作曲万城目正、作詞はなんと「陸軍省選定」。

主（ぬし）は召されて　皇国（みくに）の勇士
わたしゃ銃後の　花嫁御寮
主の形見の　かわいい黒馬（あお）に
まぐさ刈りましょ　かいばも煮ましょ

形見と言っても、主（夫）は死んだわけではなく前線でたたかっている。花嫁である彼女は舅姑と愛馬を守って、やがて馬が軍馬として召集される日を待望している、という内容だ。それが当時の「銃後の妻」像だった。厚生省（予防局民族衛生研究会）は「結婚十訓」を発表。（現在かなづかいに訂正）

1）一生の伴侶として信頼できる人を選びましょう。2）心身ともに健康な人を選びましょう。3）お互いに健康証明書を交換しましょう。4）悪い遺伝のない人を選びましょう。5）近親結婚はなるべく避けるようにしましょう。6）なるべく早く結婚しましょう。7）迷信や因襲にとらわれないこと。8）父母長上の意見を尊重なさい。9）式は簡素に届けは当日に。10）産めよ殖やせよ国のため。

その2年後1941年、「人口政策確立要綱」が閣議決定された。キーワードだけご紹介しよう。

趣旨に「我国人口の急激にして且つ永続的なる発展増殖と其の飛躍的向上」とうたい、目標を「内地人口、昭和35年1億」と設定した。ちなみに1944年の植民地を除く日本の内地人口は約7400万人であった。さらに「増殖力及資質に於て他国を凌駕するものとすること」「高度国防国家に於ける兵力及労力の必要を確保すること」などが並んでいる。

目標達成のための精神確立の一項目には「個人を基礎とする世界観を排して家と民族を基礎とする世界観の確立、徹底を図ること」。人口増加の具体的な方策は「今後の10年内に婚姻年齢を現在に比し概ね3年早むると共に一夫婦の出生数平均5児と計画すること」「不健全なる思想の排除」「健全なる家族制度の維持強化を図ること」などが記されている。

そして敗戦。国の基本も憲法民法はじめ大変革してちょうど70年。いろいろな変化があったが「結婚」の変化は著しい。日本人はたった一世代で、世界一の結婚好きな国民から、ほとんど世界一の結婚控えの国民に変化した。この結婚をめぐる変化、すなわち婚姻率の急激な低下は、国民生活における精神の深奥の大変化と言ってよい。婚姻率はベビーブーム世代が97～98％と、まさに国民皆婚社会であった。それが次の世代、1950年代生まれとなると、50歳到達時の非婚率男子20％、女子11％を数える。

なぜ、婚姻率が低下したか。その分析は各方面の研究者が行っているだろうが、戦前から戦後を生きた者の実感として私の仮説の1つを述べておきたい。

日本にとって、戦時体制という非常時は長すぎた。あの第2次世界大戦に参加した国々で民主主義国の参戦期間を調べるとそれは一目瞭然である。

ドイツとイギリス双方同じ7年間。ある時期まで孤立主義をとったアメリカの参戦期間は短くて約4年。フランスの国としての戦闘期間は僅か2年弱。

それに対して日本は15年戦争とも呼ばれ、満州事変から無条件降伏までほぼ14年間。他の欧米参戦国に比べて2倍から7倍の長さにわたった。15年といえば当時の寿命の標準（平均寿命はもっと短いが）を60年とすれば人生の4分の1を占め、職業人生、結婚生活のほぼ半分近くを占める。その間、男は家庭を離れ戦地に赴き、女は銃後を守る妻となった。それが国が示す模範的な夫婦像。どうして「産めよ増やせよ」と両立するのだろう。夫婦は単身化し別々の場所で働いた。15年も同じことが続けば、非常時は限りなく日常化していく－。

戦後の日本は、時代にふさわしく夫婦で共にいること自体が楽しい夫婦像、家族といることが喜びであるような家庭像の構築に失敗したようだ。この点を改めないで「結婚」が人気を回復し、文字どおりその産物の出生率向上という具合に行くはずはない。

まちづくりにおける男女の役割
～現在と未来　台東区谷中を事例として～

手嶋尚人　Tejima Naoto

2015年10月19日に「いたばしＩカレッジ」の講座として板橋区グリーンホールで行った。

この講座では、「まちづくりにおける男女の役割」をテーマに私自身がこの30年関わっている台東区谷中のまちづくりについて考察し体験的ではあるが男女の役割についてお話をした。

前半はパワーポイントを用いて、まず自己紹介を兼ね私自身と男女共同参画との関わりについて、そして、1986年より関わった谷中のまちづくりを説明するとともに、まちづくりに関わる人間関係、特に男女の役割についての体験談を行った。その中で現在谷中が目指す目標として「コレクティブタウン（まちの人がお互いに助け合うことがスムーズに行える町）」をあげ、特に子育て・育つ子支援が大きなテーマであることを説明した。

後半は、参加者がまちづくりについて当事者としての意識を持ちやすい様にグループワークとした。参加者は男性が少なかったため、なるべく各グループに一人は男性が入る様な構成とした。話し合うテーマとしては、最初に「自分の暮らす町で必要な子育て支援、育つ子支援は何か」次に「それを実現するための男女の役割とは」とし、意見交換をしてもらった。ここで子育て支援と育つ子支援と２つに分けたのは、地域での子育て支援の議論は良くされ意識されているが、地域でどんな子を育てるのか、また子ども側の視点に立っての地域環境を考えることも重要であると考え、造語であるが育つ子支援という言い方で説明を行い考えて貰った。

前半の谷中を事例とした講義では、谷中というエリアがなぜ魅力的であり、何を目指しているかを伝えられたと思う。

谷中・根津・千駄木、通称「谷根千」と言って魅力的なエリアとして多くの人が訪れている。そして、観光地だけでなく暮らす町としても魅力的であると移り住んでくる人も増えている。暮らす町としての魅力は、地域がほどよいコミュニケーションでつながれていることに有り、それは住民が長年にわたり培ってきたことである。日頃の町会活動はもちろん町の楽しみとしての大小新旧様々なイベントがあることもつながりを多様とし魅力的なものとしている。特にここ20年、「芸工展」「一箱古本市」などの緩やかなつながりで行われるイベントや「さんさきカフェ」「上野桜木あたり」「HAGISO」などの人が集まる民間の拠点ができていることで新しい住人もつながり易くなっている。そして、これから目指す谷中のまちづくりとして「コレクティブタウン」とした。

後半のグループワークでは、谷中の様に自分の暮らす町としてのエリア感が各人に乏しかったので、具体的には話が展開できず、一般論としての議論となってしまった。出てきた内容としては、「子育ては一つの価値観であるので、世代が違うとそのギャップが有り、違った環境で育った親であれば尚更子育てを支援するという行為が難しい。子育ての支援をして行きたいと思ってもどうして良いのかわからない。」「まず人間関係を築くことが大切。谷中の様に地域でつながれることは羨ましい。」「子供もお年寄りに可愛がられてほしいので交流の場があれば良い。」「同じ東京なのに（谷中と）こんなに住む環境が違うのかと驚く、無関心地域に住んでいるので煩わしくないがもう少し交流も欲しいが何をしたら良いかわからない。」といった声があがっていた。なかなか難しいテーマの議論であり、答えが有るわけではないが、地域のつながりについて考える機会とはなったのではないだろうか。

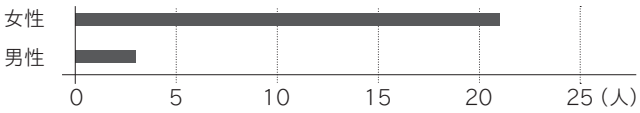
講座を行って気づいたことは、参加者の声にも有ったが、地域コミュニティの乏しいエリアが多くあり、谷中の町で盛んに町の議論ができるのは大切であると感じた。これからの社会はもっと地域コミュニティが重要になってくるので、なんとかしないといけないと感じた。

Ｉ（あい）カレッジ 全５回　受講者アンケート集計

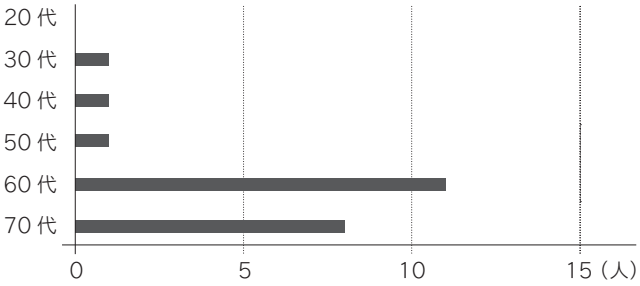
受講者：36人　回収数：25人　回収率：69%

Q1　あなたの性別・年齢などを教えてください。

性別



年代



Q2　この講座を何でお知りになりましたか？

（複数回答可）

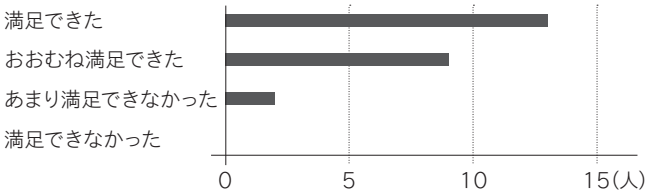
広報いたばし	23 人	92%
チラシ	2 人	80%
ポスター	0 人	0%
ホームページ	1 人	0%
Twitter	0 人	0%
友人・知人から	1 人	4%
その他	2 人	0%
回答なし	0 人	0%

Q3　参加しようと思われた動機は何ですか？

（複数回答可）

講師に関心がある	3 人	12%
内容に関心がある	22 人	88%
参加者との交流関係	0 人	0%
誘われて	0 人	0%
その他	3 人	12%
回答なし	0 人	0%

Q4　全５日間を通して、Ｉ（あい）カレッジの内容はいかがでしたか？



【満足できた理由】知らなかったことを知れて勉強になりました / 内容が充実していて改めて男と女の役割を考えさせられました / 大人になっての勉強は楽しい / 講義それぞれ内容も深く魅力的でした / 知らない分野の話が多く大変勉強になった / 特に女性の画家・音楽家の存在については興味深く思いました / 知らない事をいろいろ知ることが出来たし、雰囲気もわかった

【おおむね満足できた理由】もう少しお話が聞きたかった /70 年の歴史を様々な専門領域で学習できた / 今まで知らなかった女性の立場の事等々目からうろこでした

【あまり満足できなかった】現在の男女参画の課題という視点が弱かった / 保育室がうるさかった

Q5　その他、自由意見をお書きください。

「子どものためにも街をよく歩いたりして知っておくこと。いろんな人とのコミュニケーションをとって顔見知りになっておくのも大切。」「実践は具体的には今のところ頭に浮かばない。」「第４回で教わった音楽家の CD を買って聞きたい。」

「美術、特に絵画を見ることが大好きです。第３回の講義で視野が広がりました。今後の美術館で出会える作品をもっとしっかり見ることができるでしょう。」「母になって勉強する機会があったことはとてもよい経験でした。今まで男だから女だからと女性の私からも差別があったのかなと思い、今後はそういう発言には注意したいなと思いました。」「参加してみたいと思う反面引っ込み思案なので。」「聴くだけではなくワークショップ的（討論型）運営でも良かった。」「社会の中でのジェンダーに気付きがあった。当然とか常識と無自覚であったが、改めて見直すことがこれからも多くあると思う。」「日本が長い間鎖国という制度に縛られそれが国民性となり今でも DNA 的に残っているような気がする。今回の講座でいろいろな方々が区を通して企画なさり良い講師の方たち、そして若い方たちのために保育室まで考えられたこと、これからの道を作られたように感心しました。」

※自治体によるアンケート集計表より一部抜粋

Chapter 3-2

北区　さんかく大学（全５回）

「女性とスポーツ」

【東京都北区・東京家政大学共催事業】
期　間：2015年10月11日～11月29日、日曜日、10:00 ～12:00
定　員：30人（第４回のみ90人）
講座名：スポーツウーマンもう一つの戦い / 身体表現における美とジェンダー /
スポーツにおける女性の歴史とジェンダー / 私とスポーツ・オリンピック / まとめのワークショップ

【講師】

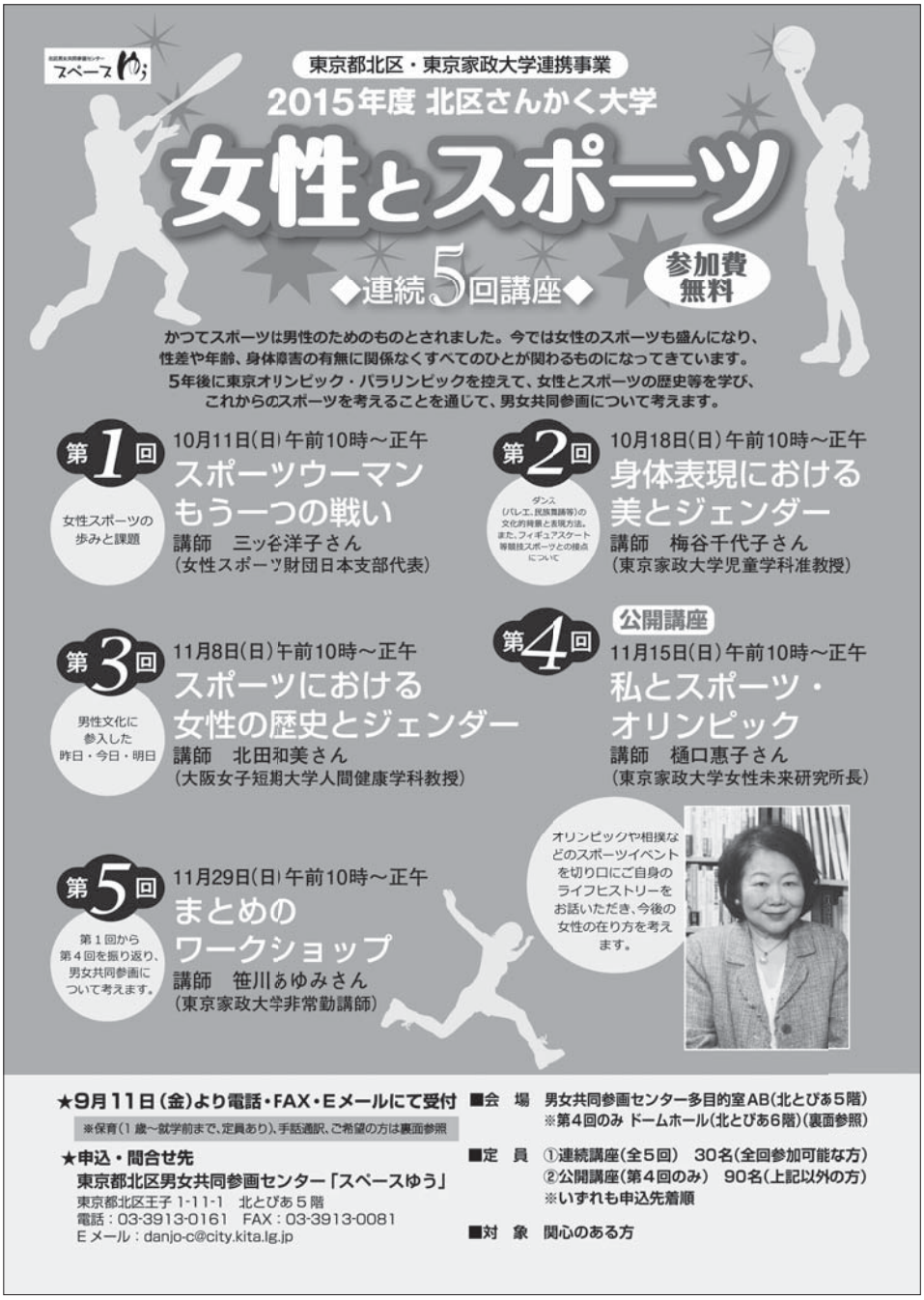
三ツ谷洋子
（女性スポーツ財団
日本支部代表）

梅谷千代子
（東京家政大学准教授）

北田和美
（大阪女子短期大学教授）

樋口惠子
（東京家政大学名誉教授
女性未来研究所長）

笹川あゆみ
（東京家政大学非常勤講師）



身体表現における美とジェンダー

梅谷千代子　Umetani Chiyoko

北区さんかく大学、本年度のテーマは「女性とスポーツ」であり、10月18日（日）に講師を務めた。オリンピックも視野に入れてのスポーツということもあり、馬術競技と舞踊を手掛かりにした。

身体表現とは、身体あるいは身体運動による感情表現であり、時によりことばや音が伴う。ことば以上に受信者に伝わるもこともある。また異文化圏で身に付いた身体技法も影響する。身体技法とは、それぞれの社会に特徴的な身体の用い方、動き、作法などの総体を指し、暗黙知により習得され、民族スポーツや民族舞踊へと繋がる。我々は芸術鑑賞やスポーツ観戦の際、異文化圏の力や技に対しても感動する。動きに酔い、心躍る。観客の呼吸やどよめきはパフォーマーと同じになっていることに気づく。

残念ながら馬術競技は日本ではあまり報道されないが、オリンピックでは、馬場馬術、障害飛越、総合馬術がそれぞれ個人と団体で争われ、計6種目の競技実施となる。1900年のパリ大会から実施され、1948年のロンドン大会までは、男性のみに参加資格が限られていた。1952年ヘルシンキ大会以降は、選手の男女の区別もなく行われている。男女の区別されない唯一の競技である。団体戦においても男女の人数制限はない。馬術競技では、運動するエネルギーは馬の役割で、そのためのリズムとバランスを与えるのが選手の役割となる。選手は経験を重ねその感覚を研ぎ澄まして、より緻密な扶助（馬への合図）を出せるようになる（日本馬術連盟）。幅広い年齢層の選手が活躍できるし、女性が男性と互角に勝負できるのである。若さを勝者の頂点とする西洋スポーツの中では、異質といえるかもしれない。馬場馬術は演技の正確さと活発さ、美しさで評価される。1964年東京大会では井上喜久子氏、2008年北京大会（会場は香港）、2012年ロンドン大会は、最高齢出場者の法華津寛氏が出場した。評価は複数の審判が運動毎の採点と、演技全体の印象を採点する。結果は％で表す。正確かつ雄大で華麗な人馬一体の演技として、達成率91％の馬場馬術自由演技（音楽付き）のビデオを鑑賞する。馬の演技に驚かれた方が多かった。

ウイーンにあるスペイン乗馬学校では、８頭の白馬が音楽にのり様々な歩様を見せながら、シンメトリーの美しい図形を描く。当然騎乗者が扶助しての演技になるが、このホースバレエはバレエの成立過程にもある。個人の技術より、隊形の美しさを見せる時代もあった。現在でもクラシックバレエの舞台では、主役以外はシンメトリーな構図を作り、舞台の安定性を示す。

舞踊を持たない民族はない。まず身体という人間そのものの存在があり、表現手段となる。音楽も演劇も舞踊から派生したと言えるであろう。古来男性が戦いに出る時、自らを鼓舞し自身を納得するために踊った。三浦雅士は「舞踊は生と死の両極を秘めている」と述べ美しさの原点としている。舞踊には舞いと踊りがある。舞いの基本は地に足をつけゆっくり歩き、回る。大地を踏み、地の神に豊穣を祈り感謝する。踊りの基本は跳ぶこと。太陽に向かい、引力など存在しないように見せる。典型はバレエである。心の動きを全身で、またわずかな指や目や足の動きで伝える。それが伝わり時間を共有できたとき、観客は深い感動を覚える。ここに見えない美の存在がある。民俗芸能でも本来男性が担っていたものが、少子化の影響で、長男、次男となり、さらに女性の参加と変化している。踊り手の性別でなく、生の人間が踊っているところに価値がある。

バレエでは、男性はスピーディにダイナミックに、女性は柔らかく、重力を感じないほどに、と役割がある。現在では男性も柔軟性の高さを示し、女性も高く飛び、素早いステップを踏むように要求される。

クラシック作品で男女別役割があるものはともかく、存在として、男女に同様の身体活動が要求される時代になった。馬術、バレエ、舞踊、フィギュアスケートなど、美を要求される演技に共通するのは、力と存在感のある身体と流れを止めない演技力であると思う。演技に惹きつけられ、演者と観客の呼吸が同じになった時、そこに美が存在する。男女の区別、地位、年齢などに関わりなく。

馬術の質問が意外に多く、表現の美やジェンダーとの関連性が希薄になったことは反省点である。

私とスポーツ・オリンピック

樋口惠子　Higuchi Keiko

1. 女子マラソンと私――教科書の女性表現

女子マラソンは今やオリンピックの華だが、正式種目となったのは1984年ロサンゼルス・オリンピック以降である。以下はその直前の私の体験である。

1980年代前半に起こった小田原市女性市会議員（元小学校教員）と「マラソン」の物語

（1）小田原市の小学校6年担任教員、河川敷にマークして卒業までにみんなで大阪まで行こう！走って記録をグラフに

（2）ついにみんなで博多まで行っちゃった！

（3）その様子を一人の女生徒が作文に。学校文集の作品が教科書会社光村図書の目に止まり、次期6年国語下のフィナーレを飾ることに。先生はそれを知らされ「孫子の代までの名誉」と喜ぶ

（4）検定も合格！印刷にかかる直前の白表紙本が先生の元に送られてびっくり。私は男になっていた！

（5）女教師から男教師へ、明白に性別がわかるよう会話の語尾が変えられていた

・もうあきてしまったの→もうあきたのかい

・自分とのたたかいなのよ→…たたかいなのだ

（6）先生の依頼を受けて、吉武輝子、俵萠子、行動する女たちの会駒野陽子らと会社へ質問に

（7）会社側は自信を持って、意識的に女教師を男性に変えたと回答

理由1――低学年で女教師を出しすぎた（調べた結果やっと同数。しかも子どもと遊び回る男教師、脇からそっと見守る女教師のさし絵）

理由2――マラソンはそもそも伝統的に男性の競技。だから女教師より男性が指導するほうが自然でありふさわしい

（8）理由1は、すでに小学校の女性教員比率50％超であったから事実に基いて全く根拠なし

（9）「伝統的に男子の競技」は出版社側が最も自信をもってした回答だったが・・

（10）そもそも伝統ってなんだろう。古代オリンピックは見物も女人禁制、クーベルタン男爵による近代オリンピック→少しずつ女性出場者ひろがる→今やあらゆる種目に男女が出場する時代へ。時代に対応し変化してこそ新しい伝統がつくられる。因習と伝統の違い

（11）教科書会社は検定を取り直し、先生はめでたく無断の性転換手術からみずからの性を回復できた。

2. 相撲と土俵と女性と

第1幕　ことの始まりは国際婦人年（1975）

ちびっこ相撲6年生、ある学校で女子が優勝。国技館で決勝。女子は土俵に乗れない伝統。女人禁制は女子がケガレるとするから？などの論議あり。本人が辞退したが、労働省婦人少年局長 森山真弓さん、協会役員を呼んで説明を求める

協会：女性をケガレなんてとんでもない。しかし長年の伝統で・・・

局長：相撲をとることはともかく、たとえば大臣が優勝杯を授与するときも土俵に上がれないのか。

協会：近い将来日本において女性がそのような立場になるとは考えられません

第2幕（15年後）1990年　森山真弓氏官房長官に

賜杯を授与に行きたいと協会に申し入れ、拒否される。文部大臣：森山真弓氏1992年、文部大臣：赤松良子氏（日本新党細川内閣）1994年、大阪府知事：　太田房江氏2000年。次々に要望するも相撲協会は「伝統」で拒否。

1991.7.3朝日新聞（夕）には「国技館の土俵上がれず」とちびっこ相撲に関する記事。このころ他の「女人禁制」の、お祭り、トンネル、海底工事などは続々改善。その間大相撲は、賭博、暴力事件などがつづき、危機にさらされた。今、相撲人気は再上昇中。しかし、相撲は今も女性は土俵に上がれない。

横綱審議会に女性を入れたり、変化はあるが…。

2015.10.27東京新聞　京都両洋高校に初の女子相撲部。

相撲という競技が男女別で行われるのは当然だが、なぜ土俵に女性政治家も乗せないのか。日本社会は、共に協力しようというとき、決まって「同じ土俵に乗って」というのに。

さんかく大学 第２回・第４回　アンケート集計

第２回「身体表現における美とジェンダー」　講師：梅谷千代子　受講者：９人　回収数：８人　回収率：89%
第４回「私とスポーツ・オリンピック」　講師：樋口惠子　受講者：65人　回収数 :39人　回収率：51%

第２回「身体表現における美とジェンダー」

Q1　今日の講義で感じたこと、学んだことをご記入ください。

「馬術競技が男女別でなく、男女差もない競技だと知り驚きました。競馬は男性騎手しかいませんが、女性には不向きなのでしょうか？贈り物には魔力があり、そのためお返ししなければならない意味があることは興味深かった」

「馬術競技が男女一緒に年齢別なく同じステージで競うということを初めて知った。クラッシックバレエ、コンテンポラリーダンス、民族舞踊などの公演にはよく行く。観ること、自分でもやることの効用について伝わった。明治の始めに民謡禁止令がしかれたこと」

「馬術競技の馬場馬術の話は大変おもしろかった。女性とスポーツというテーマで男女全くハンディがない競技があることをはじめて知った。舞踊における男性と女性の違いについて詳しく説明をしていただけたら良かったのにと感じた」

「知ってるスポーツ（フィギア・スキー）は知らず知らずのうちにジェンダー的観点で見ていたと気づいた。でもそれは無意識のことであり、ジェンダーの問題は根深いと実感した。その中で馬術は客関から見たら選手の性別も不明であるしある意味革新的なスポーツではないかと思う。踊りの中でも民族性が出るんだなと感じた」

Q2　その他ご感想、ご意見、ご要望等をご記入ください。

「身体表現においてもグローバル化しジェンダーの区別も少なくなってきたのは望ましい事だと思う」

「日舞とバレエの比較のところは、スライドがなくわかりずらかった。馬術のように映像があればもっと理解しやすかったと思う」

「馬術の話しがおもしろかった。馬が芸術的演技をするなんてはじめて知った。大学の講義のようでとても充実した講義だった。これからもいろいろな競技のビデオをみたいです」

第４回「私とスポーツ・オリンピック」

Q1　今日の講義で感じたこと、学んだことをご記入ください。

「教科書にのせる文章が女性から男性の先生に代わっていた話は男性女性の差別をよく表していた。３つの伝統について学んだ。①守る必要がある伝統②因習といわれる伝統は捨てるべき③作っていく伝統」

「『伝統』というと美しさを感じるが伝統のスタートは異端から始まることを感じた。強いものが『伝統』になっていくのだ。自らを自己変革することが強さだと実感した。そうだとすると『伝統』の言葉にとらわれ、時代の流れを無視することは『伝統』の強さを維持できるのか廃れていくのではないかと思う。でも日本人は『伝統』がすきだ。保守的な国民性なのだろう。その言葉に勝るものはない。しかし伝統だからといってうのみにするのは危険だと感じた」

「小田原のマラソン指導の物語の教科書エピソードは大変興味深かった」

「樋口先生が愛してやまない相撲が真にスポーツになる日を願います」

Q2　その他ご感想、ご意見、ご要望等をご記入ください。

「樋口先生は相撲が大好きで将来は『おかみさん』に本気でなりたかったとお話してくださるのがとてもけなげで純真でかわいらしい方だなあと思い、先生のファンになりました」

「相撲と女性の話は興味があったので時間配分の中で最初のうちに話をしてほしかった」

※自治体アンケート集計結果より一部抜粋

Chapter 3-3

群馬県 とらいあんぐるん 大学連携講座（全４回）

「文学・芸術の世界で男女共同参画を考える」

【群馬県・東京家政大学共催事業】
期　間：2015年11月7日～12月5日、土曜日、13:30～15:30　　定　員：60人
講座名：『赤毛のアン』とジェンダー / 日本映画界でみる女性の活躍 /
　　描く女、描かれる女 / 女性に作曲はできない？

【講師】

伊藤節
（東京家政大学教授
女性未来研究所副所長）

志尾睦子
（シネマテークたかさき
総支配人）

西山千恵子
（青山学院大学非常勤講師）

小林緑
（国立音楽大学名誉教授）

『赤毛のアン』とジェンダー

伊藤節　Itoh Setsu

「文学・芸術の世界で男女共同参画を考える」というのは昨年度北区において企画されたものである。好評であったため、群馬県民カレジ連携講座でも同様のものをとのことで実施された。今回は文学、映画、美術、音楽の分野での全4回シリーズとして組まれ、これはその第１回目の概略である。

敗戦後日本の出版会は戦時中の規制を解かれる一方で、新たに連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）による検閲の対象となった。ここに日本人再教育を担う民間情報教育局（CIE）が設立され、海外文学、特にアメリカ文学翻訳プログラムが立ち上げられた。なかでも奨励されたのが児童文学の翻訳である。それは民主主義教育を行う上で重要な媒体と考えられたからである。

1952年から、三笠書房は『若草物語』をはじめとして「若草文庫」シリーズを出し始めたが、特に人目を引いたのが『赤毛のアン』である。日本に初めて紹介されたカナダの作家ルーシー・モンド・モンゴメリーのこの作の原題は『緑の切妻屋根の家のアン』である。

モンゴメリがこの作を書いた20世紀初頭、欧米では参政権運動に伴うフェミニズム運動が盛んであった。状況はカナダにおいても同様で、当時ネリー・マクラング（Nellie McClung、1873-1951）が母性主義フェミニズムを掲げ、活発な参政権運動をやっていた。モンゴメリの方はこうした運動に一見消極的に思われる。しかし『赤毛のアン』の世界はそういった見方を覆してくれるのである。

マシューとマリラという年配の兄妹が、〝労働力〟を求めて孤児院に〝男の子〟を注文するが、手違いで〝女の子〟が来てしまうということからアンの物語は始まっていく。「男の子じゃないもんで、あたしをほしくないんだわ」のアンの絶望と抗議の言葉が作品のベースとなっていることから、この作はジェンダーに関わる問題を提起していることが明らかになる。全体は、シェイクスピアをはじめとする英米の古典的作品のパロディで埋め尽くされ、アンの天性の明るさで既存の価値が転覆されていくエピソードの集積となっている。不要とされたアンは、クスバート家においてなくてはならない存在となるのである。

最大の注目点は、この物語がアンの養育者であるマリラの視点で語られていることであろう。ここでは、マリラはおそらく変人の兄マシューの面倒を見るため、自分の結婚も犠牲にしたであろうことが伺われる。こういった当たり前のような女性の自己犠牲の観念や、抑圧的価値観で委縮していた彼女は、アンのおしゃべりにあらわれる純粋な批判精神によって覚醒し、人間性を回復していくのである。

一方翻訳において村岡花子はこの作にかなりの省略を施し、修正している。特にマリラの〝目覚め〟や、アンへの愛情を吐露する部分などを大幅に削除しているのである。その理由は何であろうか。戦前から少女小説分野で活躍していた村岡は、この作品を「少女」に特化して翻訳しようとしていることだ。翻訳上のマリラの言葉遣いが、童話の魔法使いのおばあさんによく似ているところにそれがよくあらわれている。

さらに村岡は「腹心の友」という表現で、女の子同士の友情や、やればできる元気な少女、その明るさを前面に押し出し、戦後の少女たちに新鮮な価値観、夢を与えた。村岡が「1869年生まれの少女」の物語を、戦後の海外少女小説のスター的存在に押し上げたことは驚くべきことである。

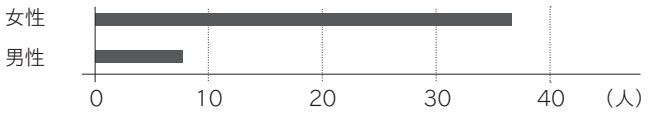
成績優秀で活発な少女が、最終的には結婚によって男性に従うモデルを示したということで、GHQのジェンダー政策の片棒を担いだという批判もあるが、今日まで続くアンの人気はそれだけではないものがある。

今回は60名定員に対し60名が参加し、若い方も男性も目立ち、質問も多くあった。

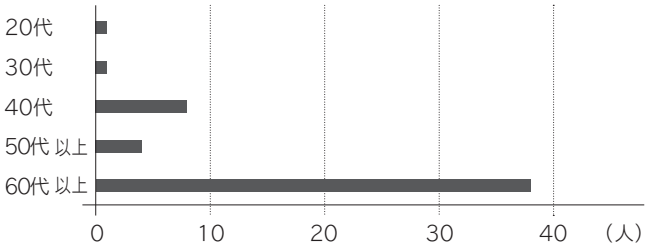
大学連携講座　第1回　受講者アンケート集計

第1回　「赤毛のアン」とジェンダー　講師：伊藤節
受講者：60人　回収数：52人　回収率：87%

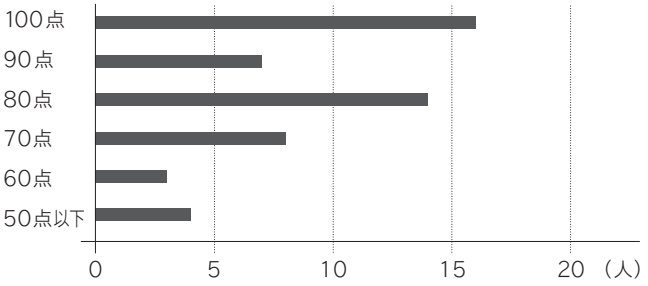
Q1　性別



Q2　年代



Q3　満足度(全体)



Q4　満足度の理由及び本日の講座の感想

「内容がわかりやすくとても良かった。特に少女小説の裏側の話は興味深かった。伊藤先生カッコイイですね。」
「私は、東洋英和で村岡花子先生から講義を受けました。あなたの愛読書は？と問われたとき『赤毛のアン』ですと答えるのに、幼すぎるかと抵抗した時代もありましたが、今は私の生き方のバイブルとして堂々と赤毛のアンを挙げたいと思います。」
「社会の流れと文学の知らなさを教えていただいた。女性の生き方の流れは沢山ありそうです。」
「とても貴重なお話を拝聴できて良い勉強になりました。大変に良い機会が得られたことに感謝いたします。」
「40代になって『赤毛のアン』を再び読んで新しい発見が色々とありましたが、今日の講義は今まで全く気がつかなかった視点を与えてくださいました。本当に面白かった。伊藤先生とゼミのような形でおしゃべりをしてみたいものです！」

Q5　当センターへの意見・要望、講演会・セミナーの希望

「次回の講演も楽しみです。」
「今回の講座は大変興味深く感じます。企画していただきありがとうございました。」
「伊藤節先生。次は別の作品を取り上げてください。」
「いつも有名講師の講演で楽しく勉強になります。男性講師や現場経験で現実経験された方のお話も聞きたい（机上理論や本での研究でなく、自分で体験、研究された方）」
「家族について。男女共同参画を早く構築していくことが社会をより良く変えていくことなので、男女共同参画をきちんと分かるために『家族について』を取り上げてほしいです。」

※自治体によるアンケート集計結果より一部抜粋

Chapter 4

学園祭

緑苑祭企画

「恋愛と結婚、その変遷を考える

～家族・儀式・男女の意識から～」

日時：平成27年10月25日(日) 14:00 ～ 16:00
会場：東京家政大学　板橋キャンパス
　　120-2C 講義室（120周年記念館２階）
司会：伊藤節
コーディネーター：樋口惠子
登壇者：板本洋子、信田さよ子、古市憲寿

Chapter 4-1

緑苑祭企画

恋愛と結婚、その変遷を考える～家族・儀式・男女の意識から～

伊藤節　Itoh Setsu

開催日：2015年10月25日(日)　14:00～16:00　　定　員：200人
会　場：板橋キャンパス　120-2C 講義室（120周年記念館２階）

【司会】

伊藤節

【コーディネーター】

樋口恵子

【登壇者】

板本洋子
（NPO 法人全国地域
結婚支援センター代表）

信田さよ子
（原宿カウンセリング
センター所長，臨床心理士）

古市憲寿
（社会学者）

女性未来研究所は10月25日（日）、2回目となる緑苑祭企画、「恋愛と結婚、その変遷を考える～家族・儀式・男女の意識から～」のシンポジウムを行った。同時期に「嫁ぐ日・晴れの日・華やぐ日―和装・洋装の花嫁―」と題する秋の特別展を開催する博物館と共催したものである。

少子化という言葉が聞かれない日はないような現在であるが、その要因としてあげられるのが非婚化である。非婚化の要因は恋愛離れ。未婚男女の恋愛離れに伴い、非婚化も加速している。団塊の世代が結婚年齢に達したころは、婚姻率は97%に達していた。それが今や「生涯未婚率（50歳時点で1度も結婚したことのない人の割合）」が、男子で20%、女子で11%と過去最高の水準に達している（人口問題研究所）。出生率が世界最低レベルなのも無理はない。

なぜ日本の若者は結婚しないのだろうか。この日本の結婚に未来はあるのか。

これについて大いに語っていただこうとお招きしたのが3人の講師、NPO法人全国地域結婚支援センター代表の板本洋子氏と、原宿カウンセリングセンター所長で臨床心理士の信田さよ子氏、そして最近『保育園義務教育化』の本を出されたばかりの気鋭の社会学者の古市憲寿氏である。

樋口恵子女性未来研究所長のコーディネートで、ご登壇いただいた3氏にそれぞれの立場からお話しをいただいた。

まず板本氏は、個人の選択である結婚が、時代の都合に合わせた問題解決の装置とされてきた実態を示しながら、出会いがないという若い世代の叫びの中にどのような「結婚の壁」が潜んでいるのかについて講演された。長い間非婚化、晩婚化の問題解決に関わってこられたからこその、リアルできめ細かな現場に即した分析と問題提起がなされた。

信田さよ子氏は、長年DV、虐待、引きこもり、摂食障害などの夫婦、親子の問題に関わってこられ、『それでも、家族は続く―カウンセリングの現場で考える』、『家族収容所―愛がなくても妻を続けるために』などの著書を出されている。結婚とは、家族とは一体何なのだろう、と思わずにはいられないような現実を目の当たりにされてきた氏は、幻想を排し、シビアな現実に立脚した視点から講演された。

85年生まれで独身の古市憲寿氏は、現在のところは結婚をしたいと思っていないが、結婚はしても、しなくてもいいというご自分の結婚観をまず表明。日本をめぐる結婚、子ども、育児に関する危機的状況を鑑み、意識や政策といった観点から講演された。

有効な解決策があるわけではないこの問題に、異なる視点から迫ったそれぞれのお話しは深く考えさせられるところがあった。最終的に3氏に共通するのは、当然ながら「結婚は個人の選択」ということである。その意味では女性が結婚をしなければならなかった時代から、しなくても生きられる時代になったことは、喜ぶべきことではあるだろう。

女性活躍推進などうたわなくても、今日多くの女性は仕事を持っている。そうした彼女たちが考える結婚は、かつてのものとは違う問題を抱えている。仕事で疲れて家に帰る彼女たちが、かつての結婚生活のように育児、その他のケアワークをまる投げされたらたまらない。育児負担を抱え込んだキャリアウーマンが、離職や、低待遇の職に切り替えることは今や慣行ともなっているのである。それならば、仕事や趣味が充実していれば一生独身でも構わない、という選択も大いに〝あり〟となってくるのである。経済的に自立していれば、誰かに依存しなくてもよいのだから。

非婚化現象は、やはり昔ながらの結婚観が現在仕様に修正されていないところに一番大きな問題であるように思われる。樋口所長の「戦後70年、自分史的視点から現代の結婚を考える」と題するエッセイ（博物館官報64号：2015年　秋の号）は、「戦後の日本は、時代にふさわしく夫婦で共にいること自体が楽しい夫婦像の構築に失敗したようだ」という言葉で締めくくられている。

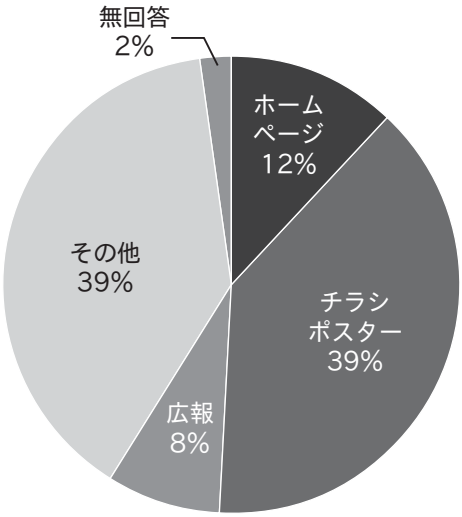
非婚問題は、やはり当事者の時代にあった〝幸福度〟から出発しない限り、解決への道筋は見えないようにも思われる。

来場者は130人と盛況であり、活発な質疑応答があった。寄せられた多くの意見感想は次頁に掲載した。

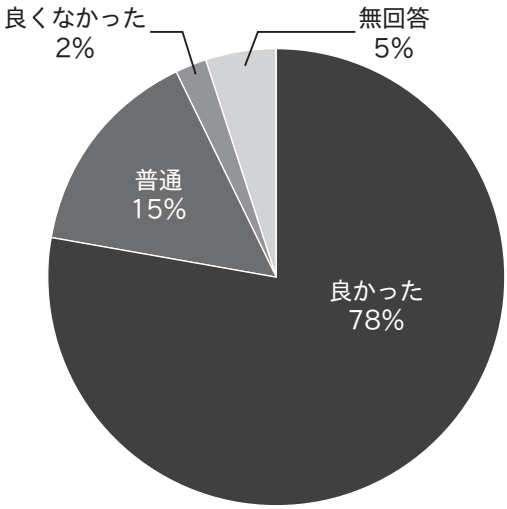
「恋愛と結婚、その変遷を考える〜家族・儀式・男女の意識から〜」　アンケート集計

参加者：約130人　回収数：55人　回収率：42%

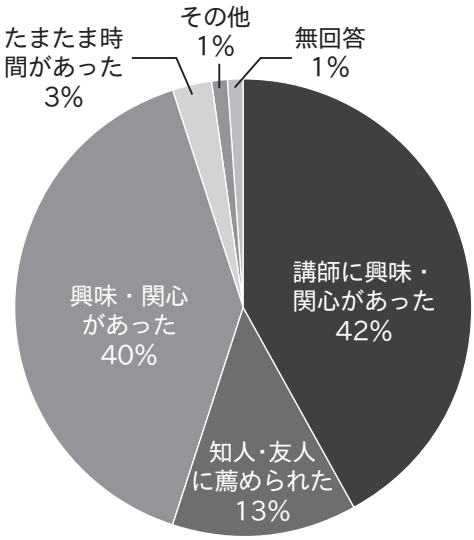
Q１　シンポジウムをどこで知りましたか？



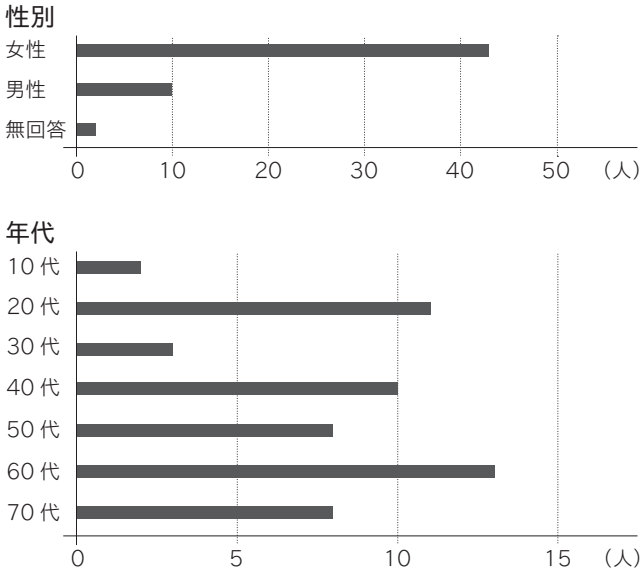
Q3　シンポジウム全体について当てはまるものに○をつけてください。



Q２　参加したきっかけは何ですか？（複数選択可）



Q４　該当する項目に○をつけてください。



Q５　シンポジウムの「内容」に関して、自由に意見・ご感想をご記入ください。

・興味深かったです。ありがとうございました。

・「結婚は成長のプロセス」という視点がすごくしっくりきました。その他にも興味深いお話がたくさんで、来てよかったです。

・安心して仕事と家庭を両立することができ、子育てができる社会の制度を求める。

Q６　シンポジウムの「企画・運営」に関して、自由にご意見・ご感想をご記入ください。

・素晴らしい３人の先生方のお話を一度に伺えるだなんて、本当に良かったです。

・博物館のもよおしものと関連していて良かったです。今回は取っつきやすい話で良かったです。

・大学祭の中での一部の企画で、もったいないくらい目立たなかったです。無料でありがたいです。

※一部抜粋

数字で見る結婚

フロフィール
NPO法人全国地域結婚支援センター　代表

Chapter 5

女性未来研究所
シンポジウム

第１回女性未来研究所　シンポジウム

「メディアと女性～発信者として受信者として～」

日　時：平成27年12月10日(木)　15:00 ～ 17:00
会　場：東京家政大学　板橋キャンパス
　　第９階段講義室（５号館４階）
司　会：落合恵子
登壇者：野本瑞穂、金井田亜希

Chapter 5-1

メディアと女性～発信者として受信者として～

メディアの『現場』からの声。受け手の『現場』からの声

落合恵子 Ochiai Keiko

好むと好まざるとにかかわらず、日々わたしたちはおびただしい情報のシャワーを浴びている。
授業中、メディア・リテラシーについて触れた時、マスメディアについて「現場の声に接したい」といった学生からの要望が少なからずあり、以下のシンポジウムを立案、開催した。

2015年12月10日（木）15時～17時。学生参加者281名、教職員数名。シンポジスト・金井田亜希（株式会社集英社新書編集部）野本瑞穂（NHKラジオディレクター）、進行・落合恵子

メディアやシンポジストに対する質問を学生に募ったところ、任意の提出であったにもかかわらず事前に140数通の質問が届けられ、関心の高さがうかがえた。それら学生からの質問を軸にシンポジウムスタート。文字数の関係があり、詳細に紹介できないのが残念だが、まずはその「現場」からの声を。

【司会】

落合恵子

【登壇者】

金井田亜希
（株式会社集英社新書編集部）

野本瑞穂
（NHKラジオディレクター）

質問・現在の仕事を志望した理由。

野本…NHKの番組を制作していますが、局員ではありません。学生時代、テレビやラジオの番組を制作したいと考えていたが、テレビ局やラジオ局に勤めたいのか？と自分に聞いてみると、そうではない。番組をつくりたい、というのが望みだった。制作会社に勤めている友人がいて、現場の人たちに会ったり話を聞いているうちに、手伝ってみないか、と。気がつけば、番組制作にかかわっていた。もし、メディアで働きたいという学生さんがいるなら、出版社や局に「就職」したいのか、制作そのものにかかわりたいのかということで違ってくる。

金井田…何が何でもメディアへという志があったわけではない。むしろ社会にはどんな仕事があるのか、自分はどんな仕事に就きたいのかもよくわからなかった。そこで、どういう仕事を「やりたくないのか」を書きだしてみた。くだらないけれど、早起きは辛いとかお金の勘定はちょっと、とか。それらをリストアップしたものを見ていると、やりたいことが薄っすらと見えてきて、出版社を考え始めた。

質問・仕事上、最も心がけていることは？

野本…ラジオの向こう側にいるリスナーの、「気分」。曜日や時間帯にもよるが、祝日の朝など、ゆったりと聴きたいに違いない。どんな気分で聴いていて、どんな気分になりたいと思っているか。まずはそのことから企画はスタートする。

金井田…2000年に入社をして、16年目だが、入社当初は女性誌に所属、ありとあらゆるテーマを担当。現在は新書という書籍担当をやっているが、企画を立て、著者を口説いてお尻を叩いて書いてもらう。政治、経済、破壊、哲学、美術と様々なテーマがあり、私自身日々猛烈に勉強をしながら漸く追いつくといった感じだ。

質問・女性であることによるマイナス・プラスは？

金井田…私が勤務する集英社の男女比はほ半々。女性でマイナスだと感じたことは、私の場合はない。特に女性誌は女性編集者がほとんどで、むしろ男性のほうが大変かもしれない。従ってプラスだったことも特にはない。

野本…ラジオの現場では男女比6：4、女性のほうが多い。テレビは男性が多く、男性目線のメディアではないかと思うが、男同士なら思いっきり叱ったり注意することができるのに、相手が女性だと、多少の遠慮があるのではないかと思うことが。

学生…SNS等が発達すると相互作用というか、活字を読まなくなる傾向があるのではないか？

金井田…SNSと活字離れの関係は、先に活字離れがあったのではないかと考えるが、SNSが発達して書籍のプロモーションがしやすくなったのは事実。またSNSから著者を見つけることも可能だ。SNSを「敵」と見なすのではなく、それをうまく使う立場でありたいと私は考える。

質問・仕事を辞めたいと思ったことはあるか？

野本…辞めたいと思ったことはない。私はフリーなので、辞めたいと手を挙げればいつでも辞められる。むしろ「もういいですよ」と切られることに脅えがあって、依頼されたら断れない状況がある。

金井田…瞬間々々で「逃げたい」と思ったことはあるが、辞めたいと思ったことはない。勤めている会社を私は良い会社だと思っているし、より良い会社にしていきたいという思いが強い。

質問・これから就職活動を迎える学生へのエールを。

金井田…就職活動中、体重が5.6キロ落ちた。試験に落ちまくると、自分が全否定されたような恐怖があった。先ほど野本さんも言われたように、メディアで働こうと思えば、必ずしも会社員になる必要はない。フリーでもいいし、契約社員もある。仕事の内容そのものには変わりはない。就職活動は大変だと思うが、頑張って！

野本…まだまだ自分が本当にやりたいと思うことの整理ができていない学生さんもいるはず。1,2年生の時は当然。「いつか、最終的にやりたいことがやれるところに行くんだ！」という思いを、どうか捨てないで。

＊

他にも次のような質問がアンケートには多かった。

・自分が取り上げたいテーマと、現実に任された仕事との間に溝を見つけた時はどうするか？
・自分の意見や主張を反映させるために、日頃心がけていることは？
・すでにメディアで働いていて、『成功者』に見えるが、望みながら果たせなかったひとと、『あなた』との違いは、どこに何にあると思うか？
・マスメディアは公正中立だと言われているが、それは真実か？等々。

2時間に亘るシンポジウムに参加しての感想は、同様に任意提出であったが、計218通に及んだ。アンケートの返りは以下の割合となる。1年：家政94、人文45、不明13、2年：家政28、人文18、不明1、3年：家政8、人文4、4年：家政2、不明1、教員4

「感想」

・本でも番組でも世に出すためには、大変な過程を踏むことを痛感。話を聴いて、「すべて自分で考えることから始めよう」と思った。今後の就活に役立つ話だった。
・2人のシンポジストは若いのに、考え方がしっかりしていて、私も何年か後にはあそこまで到達できるのか、と不安になった。「だから、今からたくさん考えることからしよう」と決めた。
・インターネットなどの電子機器が発達している現代においても、新聞などの紙媒体も（受信者として）使い分けることができるようになろうと考えた。好きな仕事をし、その仕事をもっとよくしようとしている女性は素敵だ。
・メディアに対して受動的になっていたので、「もっと能動的にならなくては」と感じた。
・メディアの中の女性たちも特別な人ではないのだ、とシンポジウムを通して身近に感じることがでた。
・私も自分がやりたいと思っている仕事に就けるよう、しっかり努力する。
・女性誌だからといって、家事のことばかり書いているのは差別だ、という言葉に同感。また仕事には責任感が必要だと再確認。参加して本当に良かった
・情報の「取捨選択」をしっかりしようと思った。
・（今まで）一方的なメディアの受動者であったと思うが、発信者側の考えを知ることで、「メディアとの向き合い方を少しずつ変えていこう」という意識を持てた。自分と社会とをしっかり結びつけていきたい。
・本を1冊作るのに、番組を1本完成させるのにどれだけの人々が関わり、どれだけの労力が必要か考えさせられた。それは他のどんな仕事にも当てはまることなのだと思う。
・メディアに対して（受け手の）わたしたちが声をあげること、能動的にかかわることが大事だと考えた。
・何かを知ろうとすること、それに向かって行動することの大切さを感じた。
・これから就職活動が始まる。「辞めたい」と思わない、ずっと好きでいられるような仕事を選びたいと思うが、そのためにしっかりした準備をして、めげずに頑張りたい。
・3年で就職活動も目前。（お2人の話は）すべての企業において言えることだと思う。

ほんの一部、それもある部分の抜粋でしか紹介できないのが残念だが、シンポジストの発言を、多くの学生が自分に引き寄せて考えてくれたことが何よりうれしいことだった。数年後、参加者の中から発信者が誕生するかもしれないし、そうでなくとも、メディアとの向かい方が今までとは違った受信者が増えることが、結局はメディアをより深く成長させるものでもあると再確認した。メディアを成長させるのは、わたしたち自身である。国民は自分に見合った政治しか持てないと言うが、同様のことがメディアについても充分言えるはずだ。

Chapter 6

外部セミナー
研修会
シンポジウム等

東北大学出張講座報告「女性と社会進出」

～国際教養としての「キャリア教育」の必要性～

日　時：平成27年5月26日(火) 16：20 ～ 17：50
場　所：東北大学川内キャンパス（宮城県仙台市）
出張者：並木有希

日本国政府主催「WAW! Tokyo 2015」参加報告

～エンパワメントの様々な可能性に向けて～

日　時：平成27年8月28日(金)・29日(土)
会　場：グランドプリンスホテル新高輪（東京都港区）
参加者：並木有希

一般社団法人ジャパンダイバーシティネットワーク(JDN) 主催「シンポジウム 2015」参加報告

～ダイバーシティが社会を変える（Diversity is the Game Changer）～

日　時：平成27年9月2日(水) 13:30 ～ 20:30
会　場：ホテル椿山荘　オリオン（東京都文京区）
参加者：木元幸一

独立行政法人国立女性教育会館(NWEC)主催「大学等における男女共同参画推進セミナー」参加報告

～21世紀の日本は女性が救う！～

期　日：平成27年12月3日(木)～4日(金)　1泊2日
会　場：1日目　プラザエフ　主婦会館（東京都千代田区）
　　2日目　国立女性教育会館（埼玉県比企郡嵐山町）
参加者：仲谷ちはる

Chapter 6-1

東北大学出張講座報告「女性と社会進出」

～国際教養としての「キャリア教育」の必要性～

並木有希 Namiki Yuki

これからの大学では「働きながら自分らしく生きること」をキャリア教育の重要な一部として捉えることが重要です。年代・立場・性別を超えて一緒に考える場を提供することで、学生の共感力を高め、様々な価値観の中で主体的に自分の人生を創っていく人材が育ちます。東北大学の先進的な授業に参加させていただきました。

2015年5月26日、東北大学　高度教養教育・学生支援機構グローバルラーニングセンター水松巳奈先生担当の授業「グローバル社会で活躍する人材のための国際教養」において、「女性と社会進出」の題目で、ゲストスピーカーとして講演する機会をいただきました。授業目的は「女性の社会進出の現状と課題について理解し、また、その理解を踏まえて学生が具体的なアクションを取れる」と設定されていました。これは、女性未来研究所のワーキングプロジェクト「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランスグループ」のそれと合致するものです。そこで、昨年度からプロジェクトで行っている研究会「ワークライフケアバランスを考える会」の活動について、またそこで得られた気づきと行動のきっかけについて、学生によるワークを挟んだ講演を行いました。（詳細は次ページの授業資料を参照ください）

女性未来研究所での活動及び、筆者が2013年から参画している在日米国大使館広報・文化交流部のエンパワメント講座企画の経験を通して見えてきたのは、昨今、「女性の」エンパワメントという問題設定は既に、自明かつ唯一のものではないということでした。2014年に本学で講演いただいたデラウェア大学災害研究センター副所長トリシア・ヴァクテンドルフ社会学部准教授の、東日本大震災に関する知見が参考になると思われます。すなわち、

①「弱者」はその場面や状況によって替わり、固定されたものではない。

②ただし、女性、高齢者、子供など、危機的な状況において困難に直面する可能性の多い脆弱性の高い属性がある。

③しかし、そのようなグループの持つ強みを認めて活かすことで、危機的な状況から脱し、さらに社会の紐帯を強めることが可能になる。

これらの気づきは「empowerment（力を持たせる・力に気づかせる）」の本質を言い表したものです。日常的な社会生活の中で、自分が強者にも弱者にもなりうるということ、また、自分の特性や能力を活かしたアクションを起こすことで、どんなにそれが小さくとも、何らかに社会を変える縁になりうるということ、自分はそのような多様性を含んだ存在であるということを伝えることで、エンパワメントやリーダーシップという漠然とした概念を行動に変えるきっかけを学生に与えられるのではないでしょうか。

今回の受講生は学部1年生で、将来的に海外留学や就職を考える意欲の高い学生ばかりでした。特に男子学生が多く、まだ将来のプラン作りにはピンとこないという正直な反応もあり、また、はじめて自分の両親、特に母親のことについて客観的に考えたという声もありました。とかくライフプランは、育児出産との兼ね合いで、女子学生に考えさせることとなりがちです。しかし本授業全体のテーマである「国際教養」の通り、自分の進路と将来のプランについて、大きく多様性のある文脈において、自分の立ち位置を考えることこそ教養であるという立場が今後重要になると考えました。男性だからこそ、若いからこそ、海外で活躍する人材だからこそ、ライフプランをキャリアプランと切り離すことなく社会の現状と、自分の希望を正しく把握し、知っておくことが重要であるというメッセージを発信して、大学の進歩的な姿勢を明らかにするものでした。このような東北大学の先見性を見習い、本学でのキャリア教育にも取り入れて行きたいと考えました。

貴重な機会をくださった水松先生と学生の皆様に深く感謝いたします。

キャリア形成とWork Life Care Balance

誰もが働きやすい社会のために

1. はじめに
2. ワーク：自分のキャリア？
3. 現在の日本の「家族」の形
4. 「女性」問題から「家族」問題へ
5. ワーク・ライフ・ケア・バランス
6. 流れを変える－いくつかの事例
7. ワーク：行動を起こす
8. まとめ

キャリア形成の一例

00(23)	大学卒業（BA）			
01(24)	大学院進学M1			
02(25)	M2 (MA)			
03(26)	D1 留学１	奨学金		
04(27)	留学２	奨学金		
05(28)	留学3	奨学金	結婚	
06(29)	D2	非常勤		
07(30)	D3	非常勤	第一子	
08(31)		非常勤・ポスドク研究員		
09(32)		非常勤・ポスドク研究員		
10(33)		非常勤・ポスドク研究員		
11(34)	学位取得(PhD)		第二子	
12(35)		専任講師		
13(36)				
14(37)				
15(38)				

東京家政大学女性未来研究所

- 東京家政大学　創立1881年　女子大 @東京・板橋区
- 家政学部・人文学部

- 東京家政大学女性未来研究所
- 2014年創立
- 所長・樋口恵子
- プロジェクトチーム「女子大学におけるキャリア教育の可能性」

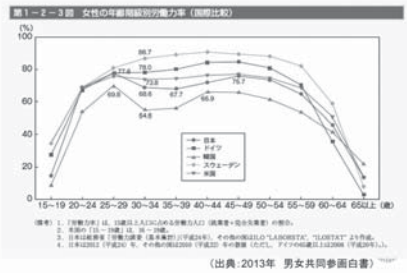
- 2013年まで　人間文化研究所
- 「災害と生活」
- Disaster Research Center, University of Delaware

１０年後の自分

１０年後の自分について
イメージしてください

- どんな進路？
- どこに住んでいる？
- どんな家族？
- 子供はいる？
- 親はいくつ？

M字型就労

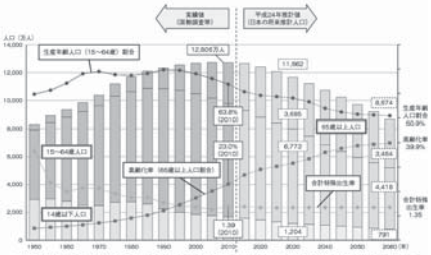


（出典：2013年　男女共同参画白書）

国策としての女性活用

- 安倍政権　"Shine!"　「女性が輝く社会」
- ウーマノミクス：Woman Expo 2015
  「202030 ポジティブアクション」
  （※2012年の企業の管理職女性比率（部長以上）は5%）
- 少子化対策「女性手帳」
  「3年抱っこしほうだい育休」
- World Assembly for Women in Tokyo: WAW! Tokyo 2014

10年後の社会



"Bonus" から "Onus" へ

- 「人口オーナス」
- 「労働人口が多く老人が少ない」→「労働人口が少なく老人が多い」
- ボーナスは各国一度だけ
- 日本は1990年代に終了。現在はインド、中国、シンガポール、タイなど
- 日本は急速にオーナス化：少子化対策の失敗

考えの転換の必要性

家族にまつわる問題

新聞記事から・・・

- 晩婚・非婚・少子化
- 待機児童
- おひとり介護、老老介護
- 孤独死
- 子供の貧困

Work-Life Care Balanceとは

現状 Work Life Balance という捉え方は
主に「女性による出産・育児」に焦点

しかし、考えにいれるべきなのは
CARE
誰にでも起こりえて
自分の力では自由にならないけれど
影響の大きいこと

"Working Families"

- 女性だけでなく、
  様々な立場の人をまとめるつながり：
  「家族」の単位で物事を理解する
- 多種多様なものをそのまま理解する：画一的ではなく多面的な取り組みが必要

大学でワークライフケアバランスを考える会
地域・コミュニティ共働型研究プロジェクト

アメリカの事例：男女共に成長し成功できる社会へ

- The White House Summit on Working Families
- June 23, 2014 @ Washington D.C.
- Closing Remarks
- Interviewed by Robin Roberts (ABC, "Good Morning America")

https://www.youtube.com/watch?v=N7Biilj2XIg

アメリカの事例：男女共に成長し成功できる社会へ

Nearly half of the workforce is made up of women,
Yet only 24 CEOs in Fortune 500 companies are women (less than 5%).

What do we need to do
to change the working environment
to the one
in which women can excel and grow?

21世紀の社会は

The 21st century workplace is going to be different.

- More Women are working primary as breadwinners
- More men understand their value as caregivers

When things are different, we cannot keep operating like everything is the same.

We need to shift the dialogue, change the public conversation.

実例WLCB①

- 吉田穂波さん
- 国立保健医療科学院 主任研究員
- 産婦人科医・医学博士・公衆衛生修士
- 5児の母
- ハーバード大学公衆衛生学科留学

「母親が幸せであること」

実例WLCB②

- 明治安田生命相互保険会社
  「丸の内イクメン部」
- 東京家政大学ナースリールーム
  井桁容子主任保育士

「育児が男性のキャリア・ライフに与える重要で良い影響」
父親の育児における役割と責任

ワーク②

- さきほどの自分のキャリアプランを見て、実際に自分が直面しそうな困難とその対象法を考えてみてください。
- WLCBの整備のため、自分ができることを考えてみてください。

まとめ

- ２０代後半から３０代は、キャリア構築の重要時であると共に、様々なライフイベントが起こる時期である。
  備えあれば憂いなし！
- 今後日本は人口オーナス期に入り、働き方生き方に根本的な発想の転換が求められる
- Work Life Care Balanceを意識して、多様な他者との共存を目指すことが必須

図　発表資料（パワーポイント）

Chapter 6-2

日本国政府主催「WAW! Tokyo 2015」参加報告

～エンパワメントの様々な可能性に向けて～

並木有希 Namiki Yuki

「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム（World Assembly for Women in Tokyo、略称：WAW! 2015）」に参加した。昨年からはじまった同イベントの今年のテーマは「WAW! for All」。様々な立場や世代の女性・男性が共に考え、そして行動することをテーマに、活発な討議・意見交換が行われた。

概要

2015年8月28日及び29日に東京港区新高輪プリンスホテルにおいて開催された外務省主催「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム（WAW! 2015）」に参加し、講演を傍聴する機会を得た。女性未来研究所は、樋口惠子所長が呼びかけ人のひとりである一般社団法人ジャパンダイバーシティネットワークのメンバーとして同イベントに参画している。世界中から約150名の女性分野で活躍するリーダー等が参加し、安倍総理大臣、岸田外務大臣他が参加した。各年代・各社会セクターより、会場に入りきらないほどの多数の参加者を得て、大盛況の催しとなった。

基調講演・シンポジウム

初日は、全体で基調講演とシンポジウムが行われた。シンポジウムの冒頭においてスピーチに立った安倍総理は、現在は「なぜ女性の活躍推進か」ではなく「どのように実現するのか」を具体的に議論する段階にきていることを強調し、女性活躍推進のための新たな法案の成立、公務員の女性比率の引き上げと企業文化におけるワークライフバランス意識の徹底、また、特に自然科学分野を重視した女児教育を含むエンパワメントなどを重視していきたいと述べた。

続き、アフリカ初の民選女性大統領であるサーリーフ・リベリア大統領やヒューソン・ロッキードマーティン社 CEO など、女性活躍の流れを大きく変えた海外の女性リーダーが登場し、日本に、より強力な女性活用を呼びかけるスピーチを行った。「女児の教育」と「女性と経済」をテーマとしたパネルディスカッションでは、29日のラウンドテーブルで具体的に協議される議題について、オバマ米大統領夫人やラガルド IMF 議長などからのビデオレターを挟みつつ、基調の議論が行われた。

ハイレベル・ラウンドテーブル

続く29日はハイレベル・ラウンドテーブルとして、「女性と経済」及び「グローバルな課題」の大テーマの下、分科会が各３つずつ開かれ、これらの問題に取り組むローカルなリーダーと海外からのゲストを組み合わせ、活発な議論が行われた。

筆者は「女性と経済」の中から、昭和女子大学現代ビジネス研究所・治部れんげ氏がモデレーターを勤めた「困難を抱える女性たち」を受講した。社会的インクルージョンの取り組みの NPO インクル岩手の理事山屋氏からシングルマザーが抱える困難の報告、マタハラ net 代表小酒部さやか氏からのマタニティ・ハラスメントの状況についての報告、セクシャル・ハラスメント被害女性の実態にも光を当て、国や地方自治体，企業，市民団体がとり得る具体的な支援策について、ベトナム、コートジボワールの労働相からの報告を踏まえ、デンマークやアイスランドの取り組みなどを参考にした議論が行われた。

「グローバルな課題」に関しては、「女性と教育」および「自然科学分野と女性」の分科会を傍聴した。宇宙飛行士の山崎直子氏をはじめとしイスラエル、韓国、フランスの科学アカデミー会長が揃い、教育が女性の社会進出の鍵であるということをアジア・アフリカの参加者からの

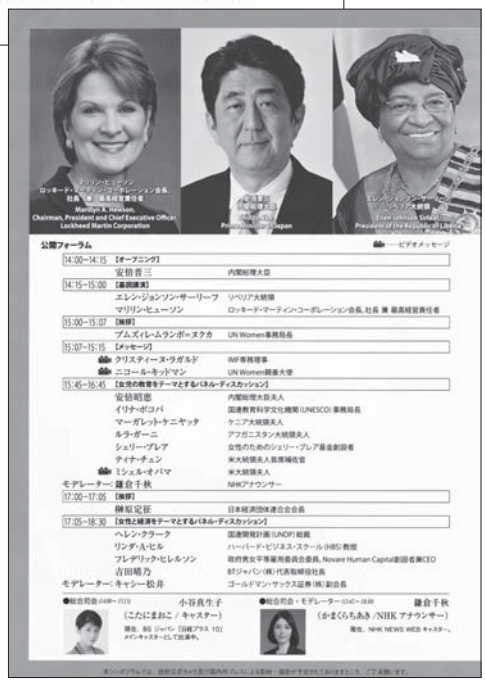
議論で再確認すると共に、指導的地位に女性が就くためには中等教育の普及が重要であること、また、自然科学分野における女性研究者の活躍をすすめるには大学での自然科学分野教育を促進し、また一線で活躍する女性研究者を支援する必要があることが確認され、それにまつわる課題が参加各国の状況と共に紹介された。聴衆には、日本各地からスーパーサイエンスハイスクール指定の高校の学生が招かれており、若者が専門家に出会い、意識を高める貴重な機会が広く与えられていることが素晴らしいと感じた。

縦断的なテーマが設定されたスペシャル・セッションにおいては、Gender Action Platform 代表大崎麻子氏の司会による「トイレを通じた女性のエンパワーメントの実現」が興味深かった。発展途上国における安全・安心で快適なトイレ環境の整備が、女性の安全や地位向上、生活の質の向上に果たす役割に着目して、国連開発計画の取り組みの紹介、またそれを踏まえた日本メーカーのインドやアフリカでの先進的取組も紹介された。内容、議論の具体性のみならず、テーマ設定や結びつけ方で興味深い議論を生み出せることを知り、コーディネートとモデレーションの大切さを学んだ。

所感：これからのエンパワメント

まず、このような大規模の催しが開催されることを、素晴らしい変化の現れであると捉えたい。特に、男性のインクルージョンが中心的課題であり、また、ダイバーシティの確保が経済的・政治的に日本が国際的なプレゼンスを保つためには不可欠であるという認識を、政府がはっきりと示すことに強い意義を感じた。もちろんこれらの議論の中で提示された理想と現実のあり方は乖離し、実際の運用上様々な課題はあるかもしれないが「女性の活躍促進は女性だけのためではなく、すべての人々に利する」という考えをあらゆる機会を使って明示することは必要不可欠であると考えた。岸田外務大臣のスピーチの中に「日本は決意を実行に移す」という言葉があった。このシンポジウムで各パネルから出された提言は、クロージングセッションの中で WAW to do 2015 という宣言にまとめられたが（外務省ホームページより閲覧可能）この中から、できるだけ多くの事項を実行に移して行く努力が、社会の各セクターで求められる時代であると考えた。

翻って、教育機関である大学、また当研究所のような機関ではどのような貢献ができるかということになるだろう。今回は、様々な切り口から女性問題とエンパワメントを考えられるということに気づいた。テーマの設定、パネルの人選など独自の議論を起こすモデレーターの工夫によって、ダイバーシティに富む社会を作るための取り組みと知見が明確になった。このような人と話題のキュレーションこそ専門家の貢献すべき分野なのではと考えた。また、このイベントには学生ボランティアが多く参加していたが、このような場所に積極的に学生の参加を促し、視野を広げるようにさせたい。SHINE! Weeks と題し様々な機関が関連イベントを行っていたが、女性未来研究所でもこの機会を利用すべきである。女性のキャリア教育に長い歴史を持つ東京家政大学の強みを活かして、JDN のネットワークを活用して、社会においてのプレゼンスを高めたい。



Chapter 6-3

一般社団法人 ジャパンダイバーシティネットワーク（JDN）主催「シンポジウム 2015」参加報告

～ダイバーシティが社会を変える（Diversity is the Game Changer）～

木元幸一 Kimoto Koichi

JDN（Japan Diversity Network）発足後１年の活動報告と、ダイバーシティ社会への更なる推進を目的としたシンポジウムが開催された。女性の職業生活における活躍推進に関する法律の制定（閣議決定）は、平成11年の男女共同参画社会基本法に続く画期的な変革であり、これを基盤とした基調講演、活動団体の紹介、パネルディスカッション、研究会、ワークショップが展開された。

9月2日　13時30分　椿山荘

概要

第一部のシンポジウムは、内永ゆか子会長挨拶で、このJDN（Japan Diversity Network）発足後１年が経ち2年目を迎え、この会の意義と目的および2回目のシンポジウムを開催するに当たっての趣旨説明が述べられた。ドイツのメルケル首相のビデオメッセージ等数人の外国要人女性からにJDN活動に対する応援メッセージが報告された。

基調講演として、日本経済団体連合会副会長の古賀信行氏と経済同友会副代表幹事の志賀俊之氏が、各15分講演をした。

パネルディスカッション「ダイバーシティ推進をどう加速させていくか」は、モデレーターの立教大学尾崎俊哉氏が、セッション１の中央官庁幹部の方々によるディスカッションとセッション２の民間分野の代表の方々によるディスカッションの趣旨について説明した。平成11年の男女共同参画社会基本法に続く、今回の女性の職業生活における活躍推進に関する法律の制定は、大変大きな意味があり、今回は官の立場からと民の立場からに分けてディスカッションを企画した。

国は、女性の職業生活における活躍の推進に関する基本方針を策定し（閣議決定）、地方公共団体は、上記基本方針等を勘案して、当該地域内における推進計画を策定することを努力義務とすることとなった。また、事業主行動計画等においては、301人以上の大企業については義務化され、300人以下の中小企業については努力義務とされた。原則、事業主行動計画の策定については、平成28年4月1日施行で10年間の時限立法となっている。

その内容は、①自社の女性の活躍に関する状況把握・課題分析、②状況把握課題分析を踏まえた行動計画の策定・届出・公表、③女性の活躍に関する情報公表、④認定制度、⑤履行確保措置の５項目からなっている。

セッション１においては、中央官庁各幹部10人がそれぞれの所轄での取り組みについて話をした。セッション２においては、大企業と中小企業の民間事業主体の方々の７名が現状報告と課題・今後の目標について意見

ＪＤＮシンポジウム 2015

日　時：2015年９月２日（水）
第一部 13:00－19:10　第二部 19:10－20:30
場　所：ホテル椿山荘東京
参加者：664名（一般参加512名）
後　援：内閣府男女共同参画局、消費者庁、総務省、外務省、財務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省
協　賛：アフラック、第一生命株式会社、藤田観光株式会社、NPO法人J-Win G&S Global Advisors Inc. カルビー株式会社、株式会社グローバリゼーションリサーチインスチチュート アサヒビール株式会社、ポッカサッポロフード＆ビバレッジ株式会社、ANAホールディングス株式会社

第一部

総合司会：山本加津子氏（消費者力支援研究所 理事長）

■内永代表理事ご挨拶

■海外からの応援メッセージ

＊ドイツ連邦共和国メルケル首相からのビデオメッセージ

＊シェリー・ブレア元首相夫人（イギリス）

＊エリザベス・ブロデリック人権委員会・性差別担当コミッショナー（オーストラリア）

■基調講演

＊経団連副会長 古賀信行氏
（野村ホールディングス株式会社取締役会長、野村證券株式会社取締役会長）

＊経済同友会副代表幹事 志賀俊之氏
（日産自動車株式会社取締役副会長）

■パネルディスカッション

「ダイバーシティ推進をどう加速させていくか」

モデレーター：尾崎俊哉氏
（立教大学 経営学部教授 国際経営学科長）

を述べられた。この法律制定の背景や世界の趨勢との比較に始まり、女性の働く職場環境について保育施設の充実や就業時間の自由選択、就業場所の拡大などの働き方の工夫や改善についての報告があり、単に女性の活用だけを推進するのではなく、障害者など多様な人材が活用と言うよりも活躍できるワークライフバランスを含む取組についても、職場の現状と課題及び今後の展望について、官から、民からそれぞれ報告と意見が述べられた。また、女性管理職割合を30%目標とすると、現状の割合と当面の目標20～25%を達成課題として取り組む姿勢について計画立案の段階から各説明があった。

セッション1

中央官庁幹部の方々によるディスカッション

～女性新法の成立を踏まえ、期待する社会の変化と官庁の役割～

パネリスト：内閣官房 内閣審議官（内閣人事局）定塚由美子氏 内閣府 大臣官房審議官（男女共同参画局担当）華房実保氏 消費者庁 長官 板東久美子氏 総務省 官房総括審議官 安藤友裕氏 財務省 大臣官房審議官（関税局担当）小部春美氏 文部科学省 生涯学習政策局長 河村潤子氏 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 雇用均等政策課長 小林洋子氏 経済産業省 大臣官房審議官（経済産業政策局担当）保坂伸氏 国土交通省 総合政策局次長 篠原康弘氏

セッション2

民間分野の代表の方々によるディスカッション

～ダイバーシティ推進における各分野の現状と、これからの重点取り組み～

パネリスト：日本看護協会会長 坂本すが氏 連合会長代行 氏家常雄氏、第二東京弁護士会会長 三宅弘氏 名古屋大学総長 松尾清一氏 アフラック本社社長 ポール S. エイモスⅡ氏 株式会社コラボラボ代表取締役 横田響子氏

2番目のプログラム JDN 研究会「ダイバーシティを語り合おう～ Game Changer にあるために」は、まず、今年度スタートした5研究会（ダイバーシティマネージメントについて、働き方改革、グローバル、技術系女子の育成について、女性の意識）の趣旨と進行状況について各代表者から説明かあった。

続いて、5研究会のワークショップが、各会場に分かれて行われた。私が参加した「女性の意識」のワークショップには、約100人が10人ずつのグループに分かれて、共通テーマである女性の活躍を妨げる3つの事項を各自挙げて活発な討論を行った。職場や家庭環境の不十分さと家事を優先せざるを得ない状況や、ロールモデルが身近に少ない、現状に満足している、自信が持てるまで数年かかるなど様々な意見が出て、時間が少ないためまとまりはなかったが、現場で働く女性の生の声が聞け、大変刺激的でした。

以上終了後、19時半から懇親会がありましたが、私は欠席いたしました。

■JDN 研究会

「ダイバーシティを語り合おう～ Game Changer になるために～」

セッション1 研究会活動紹介

ダイバーシティマネジメント：倉重英樹（株式会社シグマクシス代表取締役会長兼社長）代行 郡 のぶ（株式会社シグマクシスクオリティ＆ プロセスマネジメント部 / 購買部ディレクター）

働き方改革：小室叔恵
（株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役社長）

グローバル：津坂美樹（ボストンコンサルティンググループシニア・パートナー＆マネージング・ディレクター）

技術系女性の育成：宇田茂雄
（日本アイ・ビー・エム株式会社 取締役執行役員）

女性の意識：内永ゆか子（NPO 法人 J-Win 理事長）

セッション2 研究会ワークショップ (テーマ別)

■ゲストスピーチ 村木厚子氏 厚生労働事務次官

Chapter 6-4

独立行政法人　国立女性教育会館（NWEC）主催「大学等における男女共同参画推進セミナー」参加報告

～21世紀の日本は女性が救う！～

仲谷ちはる　Nakaya Chiharu

2015年12月3～4日に、国立女性教育会館（NWEC）主催の表題セミナーに参加した。本節は、男女共同参画社会の実現に向けて、国公私立大学および高等専門学校を超え、高等教育機関として進むべき方向について学んだ2日間のセミナー報告である。

1. 開催趣旨、参加校等

本セミナーの趣旨は、「男女共同参画」は日本の国家戦略の一つであり、高等教育機関においては経営戦略の一つとして位置づけること、大学等が進むべき方向についての基調講演や具体的な取り組み事例の紹介を通し、学内で男女共同参画に携わる教職員を対象として、専門的・実践的な研修を行うことである。本セミナーは今年度で6回目、1日目は東京会場であったことから100名以上、2日目も80名以上の参加があった。

2. 日程

初日は、濱口道成氏（国立研究開発法人科学技術振興機構理事長、文部科学省科学技術・学術審議会会長、名古屋大学名誉教授）による基調講演、次に野村浩子氏（ジャーナリスト、淑徳大学教授）による講義、さらに文部科学省による施策説明、そして希望者のみ参加の情報交換会が行われ、終了後、専用バスにて2日目の会場（NWEC）へ向かった。

2日目は、飯島絵里氏（NWEC研究国際室研究員）による情報提供の後、分科会1「男女共同参画の視点に立った職場環境づくり」、分科会2「女子学生のキャリア形成支援」に分かれ、筆者は分科会2に参加。事例紹介やグループ・ディスカッションが行われた。最後に全大会で各分科会のまとめ、閉会となった。

3. 内容

（1）基調講演「21世紀の日本は、女性が救う！～未来を読む・女性リーダーを育てる～」

「新しい価値をどう創造していくのか」「若い人たちの未来はどう変わっていくのか」産業革命以降、人口は増え続け70億から今世紀には90億になるとも言われている。さまざまな問題が巨大化しているため、個人が取り組むことではなく、社会全体で必要性を認識することが大切。コンピューター化が進み、IoT・人工知能による第4次産業革命が到来、「子どもたちが大人になる頃、その65％はまだ存在していない職業に就く」（デューク大学キャシー・デビッドソン 2011年ＮＹ Times）と言われている。一方、日本では超高齢人口減少社会の問題、東京の高齢者世帯は全国トップとなり20年後の2035年には44％が一人暮らしになるとのこと。また、大学における男女共同参画の現状として、国立大学アクションプランでは、国立大学の女性教員比率を2015年までに17％以上（各大学において1年ごとに1％以上）に引き上げる」という達成目標が掲げているが、第10回追跡調査結果によると、達成できた大学は86大学中27大学で、前回調査より5大学増加したことが分かった。ただし、教員の女性比率は増加したが助手が圧倒的数であり管理職に課題は残る。知識基盤社会が提唱されているが、博士人財・ポスドクの低賃金の問題や女性の就業率における35歳の壁は見逃せない問題。出産後60％の女性が退職し、再就職はパートタイムという問題解決には社会整備が必要。安心とサポートには「職住接近」という環境

整備の課題から。東京では大原則である。小学生がお昼休みに帰れる距離。社宅、保育所、学童保育が近距離にあることが必須である。

(2) 講義「なぜ、女性活躍推進に取り組むのか？ ～企業の取組の視点から～」

組織が女性の活躍推進に取り組む意義やポイントについての講義がなされた。先進国のなかで、日本はいまどんな段階にあるのか。海外で目につく女性トップの活躍、その一方で日本の女性取締役の割合は1％とアラブ諸国並み。世界経済フォーラムの2015年秋発表の男女平等格差（ジェンダーギャップ）で日本は145カ国中101位である。まず「なぜ女性活躍推進に取り組むのか」①企業の成長、日本の成長につながるから。340万人を超える女性の潜在労働力（就業希望者）の就労により、雇用者報酬総額が7兆円（GDPの約1.5％）増加する。②労働力人口が減るなかで女性や高齢者の労働参加が望まれるから。③イノベーションを起こす、多様化するニーズを捉えることができるから。消費を決定するのは女性が8割、ノンアルコールビールやベビーカー配慮の車など女性視点が生み出した商品も多い。つまり、多様化する社会を捉えるならば多様な人材（社員）が必要なのである。次に「どのように女性活躍推進するのか」①両立支援策の軸。男女問わずの「働き方改革」がポイント。長時間労働をなくす、フレキシブルワークの実現、業務プロセス自体の見直し、時間でなく成果で評価するなど。②キャリア形成支援の軸。「男女格差が生まれる4つの要因」がポイント。採用、経験、評価、昇進。中間管理職の意識をいかに変えるか、女性社員の意識をいかに変えるか、女性リーダーを育てるために何が必要か、等が課題。

(3) 施策説明「女性活躍推進法について」

301人以上の労働者を雇用する事業主に対する法律。平成28年4月1日までに①自社の女性の活躍状況の把握・課題分析、②行動計画の策定・届出、③情報公開を行う必要がある。労働者には、パートや契約社員であっても、1年以上継続して雇用されているなど、事実上期間の定めなく雇用されている労働者も含む。300人以下の事業主は「努力義務」となっている。女性の活躍状況・課題分析の必須事項：(1) 採用者に占める女性比率、(2) 勤続年数の男女比、(3) 労働時間の状況、(4) 管理職に占める女性比率。①を踏まえ、行動計画の策定・届出・社内周知・公表を行う。情報の公表は、2016年2月頃に厚生労働省ホームページにデータベース化される。行動計画の策定・届出を行った企業のうち、女性の活躍推進に関する取組の実施状況等が優良な企業は、都道府県労働局への申請により、厚生労働大臣の認定を受けることができる。認定を受けた企業は、厚生労働大臣が定める認定マークを商品などに付することができる。大学の取組としては、何年までに何％の女性教員（職員）を雇用するという目標を立てているか、公開しているかなどが求められる。企業の取組モデルを参考に職員用と教員用にどうアレンジできるか等がポイント。

(4) 分科会2「女子学生のキャリア形成支援」

事例紹介：立教大学における男女共生支援の取組事例～自立した学生の育成を目指して～（キャリアセンター就職支援課　古瀬憲弘）

体験プログラム、グループワーク、個人相談などを通して、学生が「自分で考え、動く」ことができるように支援している。10学部すべてにキャリアサポーターをおき、開催プログラム450回、年間相談件数約8000件、年間求人件数12,500件以上、就職率97.2％（2014年度卒）を支えている。2009年に女子学生支援PJ発足、2010年まで「女子学生支援」2015年より「男女共生支援」と名称変更。多様な働き方の特徴を正しく理解する、自立した生き方をするために自ら考えて決める、という考え方へ。2012年に女子学生支援がキャリアセンター業務に移管し、「授業」「ガイダンス」「ワークショップ」「パネルディスカッション」「講演会」で支援。テーマは様々だ。ガイダンスでは「就職活動で迷わないために今知っておいてほしいこと～お金で読み解く様々な働きかた～」、ワークショップでは「働く女性＆イクメンパパとの交流会」など。課題とアプローチは次のとおり。①マイペースで長く働けそうな大企業の非総合職を安易に選択する。→ガイダンスや個別プログラムで目線を上げる工夫。②身近な人で働く女性のソールモデルがおらず、女性が仕事をすることについて具体的なイメージを抱けない。→ロールモデルと出会える場の提供、自ら働くことの大切さを教える。③偏った情報で判断する（深く考えない）。→考え方と情報の読み解き方を教える。

(5) 所感

日常業務から離れ、世界・日本・他大学での男女共同参画に関する最新情報を得ることは、日ごろの業務を大局的に遂行する上で非常に重要であった。また、分科会での共通課題に対する直接意見交換も新たな視点に気付く機会で有意義であった。

おわりに

発足から２年目となる女性未来研究所は、研究プロジェクトに従事する研究員の活動も熱を帯び、多様な企画が組まれこれを発信してまいりました。全体行事も含めてまさにめまぐるしく動いた１年であり、研究所の基盤も少しづつ形をなしてきたように思われます。

特に本年は戦後70年という節目にあたることから、落合恵子特任教授を中心に「戦後70年、女たちのステージ…周縁から中心へ」を作成することができました。緑苑祭企画においても、戦後の日本の有り様を結婚から見なおそうと、少子化、非婚化、恋愛離れといった問題を念頭に「恋愛と結婚、その変遷を考える」と題するシンポジウムを、多様な分野から３人の講師をお迎えして開催いたしました。また第１回シンポジウム「メディアと女性～発信者として受信者として」を落合教授のコーディネートで開催し、大変好評でありました。これらを本年度活動報告書としてまとめることができ、ほっとしております。

「人生100年」のライフサイクルで過去、現在、未来を見据え、よき生のあり方を探る動きが今日ほど求められる時はないように思われます。グローバル社会の構造や意識の劇的変化の波に揉まれながらも、未来の光を探る研究所として機能したいものだと思います。

最後になりましたが本研究所の活動に有形無形にご協力いただいたすべての関係者に心より感謝申し上げるとともに、今後ともご支援のほどをよろしくお願い申し上げます。

女性未来研究所 副所長
英語コミュニケーション学科教授
伊藤 節

Itoh Setsu

List of writers

執筆者一覧

あ
青木幸子
伊藤節
井上俊哉
色川木綿子
梅谷千代子
宇和川小百合
太田八重美
落合恵子
小櫃智子

か
貝原奈緒子
木元幸一

さ
齋藤正子
鮫島奈津子

た
田中恵美子
手嶋尚人

な
仲谷ちはる
並木有希

は
樋口惠子

ま
松岡洋子
宮地孝宜
務臺久美子
崇田友江

や
吉村扶見子
米澤純子

わ
和田涼子

（五十音順）

編集後記

平成27年度 東京家政大学女性未来研究所 活動報告書をお届けします。今回の活動報告書作成にあたっては、昨年度のような編集委員会は設けませんでした。これは、編集担当者＝原稿執筆者という、自分の原稿は自分で責任を持つ（自主自律？）ということを編集方針の一つとしたからです。重要な編集方針は、定例研究会ごとに全員で検討し、細かな連絡や原稿の受渡・管理・催促は、微力ながら事務局が担いました。

2年目となる女性未来研究所の活動は、1年目と比べて更に活発に広範囲に事業を展開していきましたので新たな章立ても加わっています。研究プロジェクト、男女共同参画講座、学園祭シンポの他に、12月に「メディアと女性」をテーマに学生を中心とする300人規模の第1回女性未来研究所シンポジウムを開きました。続いて3月に第2回シンポジウムを予定していましたが諸般の事情により4月に繰り越したため、今回の報告書には反映できませんでした。

編集期間は昨年度よりも短期間でした。12月25日に原稿依頼、1月31日（研究プロジェクトにあっては2月9日）に原稿〆切と超ハードスケジュールの挑戦で心配しましたが、最後は驚くほどの加速と結束力で無事乗り越えることができました。実はこの繁忙時期に研究所員のみなさまには、もう1つの原稿をお願いしていました。戦後70年にあたる「記録集」の編集です。「着手すれば早いのですが…」という声も多く聞こえ、同時進行の編集作業はとても大変なことだったと思います。

最後に、本文レイアウト編集に多大なるご尽力をいただいた株式会社研恒社の生島由貴さんと中村友美さん、表紙協力をいただいたヒューマンライフ支援センターの坂本理恵さん、そして執筆者のみなさまに心より感謝申し上げます。

女性未来研究所 事務室主任
仲谷 ちはる

平成 27 年度 東京家政大学 女性未来研究所 活動報告書

2016 年 3 月 31 日　発行

発行	東京家政大学 女性未来研究所 〒173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
企画・編集	東京家政大学 女性未来研究所
表紙協力	東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター
印刷・製本	株式会社 研恒社